

チベット語訳『妙法蓮華註』 「化城喩品」和訳

望 月 海 慧

1 はじめに

本稿は、身延山大学東洋文化研究所の法華経研究班による研究成果の一部であり、先行する「チベット語訳『妙法蓮華註』和訳」に続くものである。今回は、第7章の「化城喩品」の和訳を提示する⁽¹⁾。既出の和訳を提示すると次の通りである。

①「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』13, 2013, pp. 1-22. ②「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』14, 2014, 印刷中. ③「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』19, 2014, pp. 35-58. ④「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林, 2014, pp.41-51. ⑤「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』39, 2013, pp.1-15. ⑥「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』6, 2014, pp. 7-22.

本章のタイトルは、鳩摩羅什訳では「化城喩」であるが、サンスクリットでは“pūrvayoga”であり、そのチベット語訳は“sngon gyi sbyor ba”と異なっている。そのために、冒頭部分の翻訳に混乱が生じている。漢文テキストは、他の章と同じように、導入部分を「来意」「釈名」「解妨」の3項目に分けて解説するのに対して、チベット語訳はこの項目立てでもできず、「釈名」の解説文は

翻訳を欠いている。チベット語訳者は、本章のタイトルを「過去の生」と理解しているために、「化城喩」に対する解釈部分の翻訳を省略したのであろう。

2 『妙法蓮華註』「化城喩品」の構成

和訳を提示する前に、本章の全体の構成を提示しておく。

- | | |
|------------------|--------------------|
| [1] 導入 | [2] 実際の説法 |
| [3] 質問 | [4] 返答 |
| [5] 大神通 | [6] 時の辺際 |
| [7] 劫の数 | [8] 知が見えること |
| [9] 如来の寿命 | [10] 法を得難いこと |
| [11] 座に入ること | [12] 散華 |
| [13] 伎楽供養 | [14] 結果の獲得 |
| [15] 転法輪の請願 | [16] 世尊の近くに行くこと |
| [17] 帰命 | [18] 歓喜 |
| [19] 悪友への依存 | [20] 善友との結合 |
| [21] 転法輪 | [22] 功德を備えることによる請願 |
| [23] 利益獲得による請願 | [24] 如来知の宣告による請願 |
| [25] 梵天供養による請願 | [26] 岩山にいる衆生を明かすこと |
| [27] 梵天の宮殿を動かすこと | [28] 光による請願 |
| [29] 諸天の賞讃による請願 | [30] 光を求めること |
| [31] 天宮を受ける請願 | [32] 賞讃と帰命 |
| [33] 転法輪の請願 | [34] 法の解説の授与 |
| [35] 梵天への依頼 | [36] 諸天による請願 |
| [37] 解説と供養の請願 | [38] 賞讃と帰命 |
| [39] 世間における希有なもの | [40] 救護者になること |
| [41] 聖道の成就 | [42] 授与 |
| [43] 解説の請願 | [44] 繰り返し |

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

- | | |
|-------------------|------------------|
| [45] 罪過の行と樂の想 | [46] 賞讃による請願 |
| [47] 法の解説 | [48] 四諦 |
| [49] 十二縁起 | [50] 樂の獲得 |
| [51] 解脱の獲得 | [52] 声聞の衆会 |
| [53] 16王子の出家 | [54] 大乘の解説の請願 |
| [55] 衆会の出家 | [56] 解説されるべき法 |
| [57] 比丘の理解 | [58] 根の次第 |
| [59] 根の成熟 | [60] 樂の獲得 |
| [61] 眞実そのもの | [62] 沙門の賞讃 |
| [63] 十方諸仏の名称 | [64] 諸仏の特徴 |
| [65] 信解が生じること | [66] まとめ |
| [67] 疑惑の除去 | [68] 声聞による仏の成就 |
| [69] 成就の理由 | [70] 根の成熟 |
| [71] 一乗の意味 | [72] 淨信の意味 |
| [73] 未了義の譬喩 | [74] 5種の功德 |
| [75] 引き返す譬喩 | [76] 変化の城市の譬喩 |
| [77] 城市に入る功德 | [78] 休息の譬喩 |
| [79] 2種の譬喩の解説 | [80] 輪廻と苦の捨 |
| [81] 難行に対する弱い心 | [82] 譬喩の意味 |
| [83] 生が残る身体 | [84] 前世の原因と現在の結果 |
| [85] 法の解説の請願 | [86] 眞実を説くもの |
| [87] 衆生利益の獲得 | [88] 法子の相続 |
| [89] 長行と合わせた理解 | [90] 了義に入ること |
| [91] 戻る譬喩 | [92] 城市を整える譬喩 |
| [93] 城市の変化 | [94] 若者を入れること |
| [95] 休憩の譬喩 | [96] 了義を示す譬喩 |
| [97] 譬喩と意味を合わせたもの | [98] 正しく説くこと |
| [99] 了義に入る | [100] まとめ |

このうち、[45] は、漢文テキストを大幅に省略したものである。その理由は明らかではないが、チベット語訳において引用される『法華経』の経文は対応箇所最初のものと最後のものが引かれているので、意図的に省略された可能性がある。

[48] の四諦と [49] の十二縁起の解説は、漢文は詳細な議論を行っているが、チベット語訳は簡略な説明となっている。特に後者では、漢文は『成唯識論』などの論書を引用して、中国の法相宗における議論を展開しているものの、チベット語訳はそれらに全く言及せずに、十二縁起の一般的解釈を述べるだけである。

[62] では、漢文の4つの解説を1つにまとめて翻訳しており、大幅な省略が見られる。続く [64] でも、漢文は南・西・北のそれぞれの諸仏の特徴に対する解説がなされているが、チベット語訳では南方にまとめてしまっている。これらの解説は、漢文でも簡略な説明であるが、チベット語訳はそれをさらに短くまとめている。同じような省略は、[86] や [89] にも見られ、後者では解説部分も「長行と合わせて理解しなさい」とし、翻訳もなされていない。

また、[69] の末尾には、漢文とチベット語訳の双方に巻数の表記が見られる。章の途中で区切られていることから、チベット語訳者も漢文に従って分巻したのであろう。

3 チベット語訳テキストの和訳

これ以後は「過去の生の章」が解説され、以前の如来が仏の所作をなし、大乘の目的を行じるそのことが説かれれば、追隨が起こされるので、その原因が説かれ、信解が生じるのでこの章が説かれている。これは、何から名付けられたのかと、その名称と、その問答の3種を説いている⁽²⁾。

この中から先に鋭根と中根の者は法を聞くことで理解が生じて授記され、劣根の者たちで法を聞いてもまだ理解を生じない者たちは、以前の大乗の行に入

る通りの行の譬喩を説いたならば、理解が生じるようになるので変化の城市の譬喩が説かれている⁽³⁾。

注釈に、衆生に七種の増上慢があり、その増上慢の煩惱を捨てるためにこれが説かれている。その七種の増上慢からも、第4のように禅定を行じ、世間の三昧にとどまることが涅槃である、と思うその対治として変化の城市の譬喩が説かれ、三昧にとどまり、小さな結果に満足を思う彼を大乘の涅槃の大城市に方便により入れるために、以前の物語の城市の譬喩を説けば、学にいる下品の者たちに変化の城市を休息の場所だけを説くことから、涅槃の大城市が宝珠の生じる場所そのものに入る⁽⁴⁾ので、この譬喩が説かれる。十無上を説いた中から第2の以前の無上の行を示すものと合わせるのならば、「大通智勝如来」と言うものが菩提の行である歡喜行の時に多くの劫にわたり修行してからまず明らかに仏と結合し、大乘の菩提に近づくことで得られるものが休息の場所であると説かれている⁽⁵⁾。また十無上の第3より増上精進の力により起こされたものと合わせられたものが、商人の譬喩により種々なる困難を行じてから目的が成就するように、如来の結果を得ることもそれと同じように合わされる⁽⁶⁾。

この章の中から、大通智勝如来の行を示すので、その世尊の特徴からこの章の名称を設定する論理から、「変化の城市と以前の生」と何故に名付けたのか。それは、増上慢の者たちが涅槃そのものを得ようと思うことの対治として城市の譬喩により特に退けるためにそれが説かれるので、意味を尋ねて名付けられている⁽⁷⁾。

[1] 経に、「比丘たちよ、過去時の」と言うものから「むこうのさらにむこうに」と言うまでには、これにより劣根を説いた導入であり、先に長行により詳細に説かれ、その次に偈頌によりまとめられ、それにも最初に方向を変えることで、その次に質問の答である。最初にも4つで、時と、名と、国と、劫で、これが最初である⁽⁹⁾。

[2] 経に、「そのようにその過去時のその時に」と言うものから「仏世尊で

ある」と言うまでには、⁽¹⁰⁾実際に説かれたものである。⁽¹¹⁾

[3] 経に、「比丘たちよ、その如来が生じてから」と言うものから「その地界をすべて置いたならば」と言うまでには、⁽¹²⁾これ以後の質問と答が設定され、⁽¹³⁾これは質問である。

[4] 経に、「比丘たちよ、それをどのように思うか」と言うものから「世尊よ、そうではありません」と言うまでは、⁽¹⁴⁾質問の答である。⁽¹⁵⁾

[5] 経に、「世尊の」と言うものから「槃涅槃のように」と言うまでには、⁽¹⁶⁾これにより大神通を示しており、「知恵の眼により知る」と言われる。またその意趣を知ることも4種の意趣の在り方により知ることで、平等を意趣するものと、異なる時を意趣するものと、異なる意味を意趣するものと、衆生の信解を意趣するものである。⁽¹⁸⁾

[6] 経に、「それから世尊は」と言うものから「大通智勝という偉大なムニ」と言うまでには、⁽¹⁹⁾時の辺際を説いたものと、知が見えることが説かれており、⁽²⁰⁾そこでも先に門が、後に劫の数が説かれており、これが最初である。

[7] 経に、「その時に無上の勝者になった」と言うものから「その多くの劫が尽きた」と言うまでには、⁽²¹⁾劫の数が説かれている。⁽²²⁾

[8] 経に、「そのように導師が涅槃して久しく」と言うものから「微細な記憶は尽きることがない」と言うまでには、⁽²³⁾知が見えることが説かれている。⁽²⁴⁾

[9] 経に、「比丘たちよ、このようにまた大通智勝」と言うものから「54になった」と言うまでには、⁽²⁵⁾質問の意味そのものを後から説いている。これは、如来の寿命と、法を得難いことと、法の明らかな獲得との3つで、これは最初である。⁽²⁶⁾

[10] 経に、「その世尊は無上」と言うものから「彼は法を明らかにしていない」と言うまでには、⁽²⁷⁾これにより法を獲得し難いことが説かれており、彼が明らかにしたものを説いたものと、座に入ることと、花を撒いたことと、明らかな歡喜が説かれている。注釈からも、これにより菩提の獲得が難しいことが説

かれており、経に、「10種の意味により菩提座にとどまるであろう」と説かれており、すべての地を震動させた後に一切衆生を集めてから座を菩提座においている。魔の降伏も「シャーキャム二仏は以前に明らかに悟られて、後に魔が降伏した」とも出ており、その他の經典に「以前に魔が降伏して、後に明らかに悟った」とも出ている。マイトレーヤ仏は、「夜出家して昼に菩提座に触れるであろう。シャーキャム二仏は6年の間難行をしてから今この仏世尊は10劫の間過ごし、法を明らかにしなかった」と説かれている⁽²⁸⁾。

[11] 経に、「このようにまた比丘たちよ、その世尊」と言うものから「高さで100由旬の大獅子座を配置する」と言うまでには、入られることが説かれており、「すべての天により世尊の座が配置される」と言う意味である⁽²⁹⁾。

[12] 経に、「その世尊が菩提座に座られるやいなや」と言うものから「その世尊に明らかに注がれる」と言うまでには、その世尊に花の束をスメール山だけ集めて供養と合わせれば、報身であることが明らかである⁽³⁰⁾。

[13] 経に、「四天王の天子」と言うものから「中断することなく鳴らし続けた」と言うまでには、音楽で歡喜が起こされ、供養される⁽³¹⁾。

[14] 経に、「そこで比丘たちに」と言うものから「明らかに仏になられた」と言うまでには、結果の獲得が説かれている⁽³²⁾。

[15] 経に、「そのように明らかに仏になられるやいなや」と言うものから『知恵が生じる場所』と言われるようになる」と言うまでには、これ以後に法輪を廻すことが説かれている。前に供養してから法輪を廻すことを請願し、後でも如来が十方の天と梵天に解説を与えており、最初にも、以前に16王子が供養をして法の解説を請願したものと、後に天と梵天が供養をして請願したものである。それも友人たちが明らかになるものと、明らかにならないものである。法の解説の請願も、先に世尊の前に行くことと、後の賞讃で明らかに請願している。世尊の近くに行くことも、それぞれの衆会と友人をともなって来る⁽³³⁾ことが説かれている。

[16] 経に、「このように比丘たちよ、それらの16王子は」と言うものから「どこかその場所に行く」と言うまでには、世尊の近くに行くことが説かれている⁽⁴⁰⁾。

[17] 経に、「この世尊を尊敬し」と言うものから「あなたは、寂滅し、無漏にとどまってから」と言うまでには、⁽⁴¹⁾ 帰命は身体による帰命と、言葉で賞讃する帰命とである。世尊への賞讃も、意図する誓願を完成する門からの賞讃と、以前になされた功德の門からの賞讃である⁽⁴²⁾。「その1座に入って」とは、⁽⁴³⁾ 10種で、転輪王の在り方でおられて十善にとどまることと、四天王の在り方で入って一切世間により如来の法行を自在にあると信解することとどまることと、帝釈天の在り方で入って一切衆生に自在になることで入ったものと、梵天の在り方で入って自と他に自在になることで入ったものと、獅子のように甚深なものを説くことに畏れないことで入ったものと、⁽⁴⁴⁾ 眞実の法におられて色と力を説くことを望まれて入ったものと、とても堅固な三昧に入って大菩提の辺際に入ったものと、大悲にとどまることで一切衆生が歓喜を起こしたことと、大悲におられて煩惱の一切苦の忍に入ったものと、金剛に入って魔と邪見のすべてを制圧することで入ったものとのことである。そこでこれはとても堅固な三昧と金剛に入ることと合わせられる。「寂滅」とは心の寂滅である。「不動」とは身体の不動である。

[18] 経に、「善と楽の喜びと」と言うものから「人の主である獅子よ、我々は善を生じる」と言うまでには、⁽⁴⁵⁾ 「世尊が明らかに悟ることで一切の有情に歓喜が生じる」と言う意味である⁽⁴⁶⁾。

[19] 経に、「このすべての衆生は導師がなく、苦しんでいる」と言うものから「そこで勝者の声も聞こえず」と言うまでには、⁽⁴⁷⁾ 衆生らが悪友に依存することと、善友と結合することを説いている。「苦」とは苦諦である。「知らない」とは道諦である。「暗闇」とは集諦である。「解脱」とは滅諦で、「それを捨てず、明らかにされない」と言う意味である⁽⁴⁸⁾。

[20] 経に、「世間を知るものよ、あなたは今日獲得している」と言うものか

ら「尊者よ、あなたに明らかに帰依します」と言うまでには、⁽⁴⁹⁾善友と結びつくことが説かれている。⁽⁵⁰⁾

[21] 経に、「そのように比丘たちよ」と言うものから「この偈頌を述べられた」と言うまでには、⁽⁵¹⁾転法輪の請願である。「利益」とは、うまく提供されるものである。「楽」とは、苦から出るために「法の解説を請願する」と言われる。⁽⁵²⁾

[22] 経に、「100の福德の特徴をもつ」と言うものから「世間にお説き下さい」と言うまでには、⁽⁵³⁾世尊には内外のすべての功德が備わっているので法の解説を請願し、大きな利益の獲得と、如来の知が宣告されているので法の解説を請願している。⁽⁵⁴⁾

[23] 経に、「我々と」と言うものから「この衆生たちが得るように」と言うまでには、⁽⁵⁵⁾大きな利益の獲得のために法の解説を請願している。⁽⁵⁶⁾

[24] 経に、「すべてを知り」と言うものから「正しいものを廻してください」と言うまでには、⁽⁵⁷⁾如来の知が宣告されているので請願しており、種々なる信解を知り、種々なる道を知り、根の上中を知り、以前の場所を知ることなどで、「これらの知をもっている」と言われる。⁽⁵⁸⁾

[25] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「大光明が遍満した」と言うまでには、⁽⁵⁹⁾梵天の王が供養して、転法輪を請願したことである。その時から震動と光で明らかにされる。⁽⁶⁰⁾

[26] 経に、「すべての世間の中の世間で」と言うものから「お互いに語る」と言うまでには、⁽⁶¹⁾大きな規模で囲まれた岩山の際にいる衆生が明らかにされる。⁽⁶²⁾

[27] 経に、「世間のすべての界と」と言うものから「大光明が生じた」と言うまでには、⁽⁶³⁾梵天の宮殿などを動かすことである。⁽⁶⁴⁾

[28] 経に、「それから東方の世間界」と言うものから「偈頌を述べられた」と言うまでには、⁽⁶⁵⁾彼らが法を聞いても最初に光でお願いし、世尊が近くに来て、法の解説を請願し、何も説かずと与えられることを知ることで、「禪定にいるすべての天が集まる」と言われる。⁽⁶⁶⁾

[29] 経に、「我々はそのすべてを長く歓喜する」と言うものから「このように十方のすべてで今日輝いている」と言うまでには、諸天が賞讃して法の解説を請願している⁽⁶⁷⁾。

[30] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「西方に来てから見た」と言うまでには、光がどこからか生じるのかを別に求めて、来られたことが説かれて⁽⁶⁸⁾いる。

[31] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「宮殿をその世尊に差し上げる」と言うまでには、天の宮殿を受けることをお願いし、世尊は何も語らずに与えることを知り、梵天たちが賞讃して、善を笑うことでそれぞれ相応するものに⁽⁶⁹⁾合わせられる。

[32] 経に、「無量の勝者は希有である」と言うものから「世間を知る者よ、お望みのまま行って下さい」と言うまでには、宮殿を与えることと、賞讃して⁽⁷⁰⁾帰命することである。

[33] 経に、「それから比丘たちよ、それらの大梵天たちは」と言うものから「如来に請願いたします」と言うまでには、⁽⁷¹⁾転法輪の請願である。

[34] 経に、「比丘たちよ、それから大梵天」と言うものから「それから比丘たちよ、その世尊はそれらの大梵天に何も説かれずにそこにおられた」と言う⁽⁷²⁾までには、法の解説を与えることである。

[35] 「それからまた比丘たちよ」と言うものから「お互いに来て、語る」と言う⁽⁷³⁾までには、梵天たちへの依頼である。

[36] 「それから比丘たちよ」と言うものから「疑いなく生じるであろう」と言う⁽⁷⁴⁾までには、諸天による請願である。

[37] 「それから比丘たちよ、100万那由他の梵天が」と言うものから「来られた」と言う⁽⁷⁵⁾までには、法の解説の請願と、供養の請願である。

[38] 「それから比丘たちよ、それらの大梵天たちは」と言うものから「帰命する」と言う⁽⁷⁶⁾までには、賞讃して帰命することである。

[39] 経に、「希有なる者が100において世間に」と言うものから「常に等しくなる」と言うまでには、世間にある貴重なものが説かれている。

[40] 経に、「80那由他劫」と言うものから「福德により世間」と言うまでには、目になり、救護者になったことが説かれている。

[41] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「温和で寂靜で、幸福になるであろう」と言うまでには、如来に対する賞讃と、温和で寂靜により聖道が成就することが説かれている。

[42] 経に、「それから比丘たちよ、世尊は」と言うものから「説かれないでおられた」と言うまでには、与えて下さることが説かれている。

[43] 経に、「それからまた比丘たちよ」と言うものから「またここに仏が明らかに生じた」と言うまでには、上と同じように合わせられる。法の解説の請願である。

[44] 経に、「それから比丘たちよ、世間界」と言うものから「我々に対する慈愛のために円満に行って下さい」と言うまでには、解説の在り方は上と同じように合わせられる。

[45] 経に、「それから比丘たちよ、それらの大梵天たちは」と言うものから「最高の菩提に触れている」と言うまでには、「この道は罪過をもつ」とは、在家の者による罪過の行が外道の悪行にとどまる罪過の行である。樂の想とは、対治によりとどまることで、「苦が刹那のみ寂滅し、樂を思い、その樂自身も失う」と言われる。

[46] 経に、「それから比丘たちよ、それらの大梵天たちは」と言うものから「10億劫で成就する」と言うまでには、賞讃して解説を請願することである。

[47] 経に、「それから比丘たちよ、世尊である大通智勝」と言うものから「12種に廻した」と言うまでには、「そのように法の解説を与えられてから解説する」と言うものと、「他者はできない」と言うものと、解説の時と、解説で利益を得ることとの4つに分けられ、これは最初である。「法輪を3度唱えて」と

は、自利と利他で、これは利他と合わせられる。「苦」とは、苦諦で、その特徴を説くために、法輪を廻す。輪の意味は、上に説いており、その輪を廻すことで無漏智が生じるので説かれている。3度繰り返しても、1度でも、13の特徴をもつことを説いている。⁽¹⁰⁴⁾「他の沙門とバラモンは廻すことができず、世尊である一切智者のみによる」と言われる。⁽¹⁰⁵⁾

[48] 経に、「このように、これは苦である」と言うものから「有情を成就させる諦である」と言うまでには、⁽¹⁰⁶⁾転法輪も四諦に依って廻すものと、十二縁起に依って廻すものである。苦は、2種の世間の有漏法のすべてである。集は、苦が生じ、起きる原因が生じる行為と煩惱の自性をともなうことである。滅は、真実と考察されたもので、滅と不動と無為の滅諦で、真実の道により苦は生じることにならない。道は、無漏の五蘊で、資糧などの道と、さらなる行道と、見道と、修道と、究竟となる道で、道のすべての集まりが道諦である。「諦」とは、⁽¹⁰⁷⁾聖者たちが入る法なので聖者の諦である。

[49] 経に、「縁起」と言うものから「滅するであろう」と言うまでには、⁽¹⁰⁸⁾縁起の逆観が説かれており、煩惱と浄化の何れかの在り方と合わせられる。⁽¹⁰⁹⁾「無明」とは、煩惱を知らない自性をもつことで、「行」は、身と口と意の3門から善と不善に入ることである。「識」は、異熟の自性をもつ種子の習気にある識である。「名色」は、この上の3縁のすべての捨が名色である。「六処」は、異熟の六根をもつものである。「触」は、異熟に触れることで、体験そのものに触れることである。「受」は、三種の領受である。「愛」は、内外の境に対して大小の3種に執着することである。「取」は、煩惱の自体をもつ所取と能取の法の煩惱の蘊を取ることである。「有」は、成熟の結果で、「輪廻を取り、三界に生じる」という意味である。「生」は、原因により立ち上がってから結果を取ることである。「老」は、結果の終わりになったことである。「繰り返す苦悩」とは、臨終を心で苦しむことである。「嘆く」とは、言葉を出すものである。「不快な思いと心痛」は、内の苦であり、詳しくはアビダルマと瑜伽行に出ているよう

に法輪が廻される⁽¹¹⁰⁾。

[50] 経に、「そのように比丘たちよ」と言うものから「禅定をなしている」と言うまでには、それぞれから樂を得ることが説かれている。「取」とは、執着によるもので、諸法への執着がないことが解脱である⁽¹¹²⁾。

[51] 経に、「それからまた最後に」と言うものから「解脱する」と言うまでには、「その次のものもそのように解脱を得る」と言うことである⁽¹¹⁴⁾。

[52] 経に、「その次に比丘たちよ」と言うものから「数を数えることを越えたものになる」と言うまでには、声聞らの衆会が説かれている⁽¹¹⁶⁾。

[53] 経に、「それから比丘たちよ、またその時」と言うものから「菩提を望む」と言うまでには、⁽¹¹⁷⁾続けて法を示しており、16王子の功德は、輪廻の網を断じること出家して法を聞くことで鋭根であり、自性が明らかなので智慧が鋭く、以前に如来に仕えたので善友と結合し、清浄な戒により大きな結果を願うことである⁽¹¹⁸⁾。

[54] 経に、「それから比丘たちよ、それらの沙門の」と言うものから「我々の思いも知って」と言うまでには、「前に声聞たちにそれと同じ法が解説され、菩薩の種姓をもつ者たちに大乘の解説を請願する」と言われる⁽¹²⁰⁾。

[55] 経に、「それからそれらの比丘たちよ、その時に」と言うものから「出家している」と言うまでには、⁽¹²¹⁾それに従う衆会の出家である⁽¹²²⁾。

[56] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「彼らすべてに詳しく解説する」と言うまでには、⁽¹²³⁾これにより衆生の根が熟するので2万劫の後に解説する時に降りて、解説されるべき法であるものが説かれている⁽¹²⁴⁾。

[57] 経に、「それからまた比丘たちよ」と言うものから「理解する」と言うまでには、⁽¹²⁵⁾比丘たちによる理解が説かれている⁽¹²⁶⁾。

[58] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「疑惑をもつようになっている」と言うまでには、⁽¹²⁷⁾これにより根の次第を説いており、鋭根の者と中根の者が解脱を得ることと、劣根の者が疑うようになって、この法を理解し難い

ことを示している。⁽¹²⁸⁾

[59] 経に、「それから比丘たちよ、世尊」と言うものから「精舎に入られた」と言うまでには、王子たちの根が熟し、衆生が解脱できることを説くために世尊が三昧に入ることが説かれている。⁽¹³⁰⁾

[60] 経に「それから比丘たちよ、それらの沙門の」と言うものから「詳しく解説する」と言うまでには、王子たちに法を説くことで有情たちの樂の獲得が説かれている。⁽¹³¹⁾⁽¹³²⁾

[61] 経に、「それぞれの菩薩も」と言うものから「完全に異熟している」と言うまでには、⁽¹³³⁾真実そのものが説かれ、「信解を得たものを広げさせ、損害による疑われたものを賞讃して歡喜させ、努力を賞讃し、所作に入れる」と言われる。⁽¹³⁴⁾

[62] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「百千の多くの者に法を説く」と言うまでには、⁽¹³⁵⁾それらの60の沙門を賞讃することと授記で、賞讃も希有なるものになり、鋭根と、明をもつことと、聖者に仕えることと、難行と、如来の知恵の保持と、衆生たちに法を説くことである。⁽¹³⁶⁾

[63] 経に、「このように、比丘たちよ」と言うものから「仏である」と言うまでには、⁽¹³⁷⁾それらの仏は「煩惱により揺れず、功德が優れており、獅子のような声を畏れなく轟かせ、魔の軍を制圧する」と名付けられる。⁽¹³⁸⁾

[64] 経に、「南方に」と言うものから「仏である」と言うまでに、⁽¹³⁹⁾それらの仏の特徴が煩惱を征服し、功德の特徴にとどまり、自と他の利益をなしてから「名付けてから」と言われる。「苦しめない」とは、その世間界で種々なる苦を行うことを気にしないので苦しめないことで、シャーキャムニの仏国土である。⁽¹⁴⁰⁾

[65] 経に、「比丘たちよ」と言うものから「その知恵は信じ難い」と言うまでには、⁽¹⁴¹⁾この經典に入り難いので先に未了義が説かれ、後に了義が説かれ、信解が生じるのである。⁽¹⁴²⁾

[66] 経に、「それは何故かと言えよ」と言うものから「比丘たちよ、私は苦

薩になった」と言うまでは、⁽¹⁴³⁾まとめである。⁽¹⁴⁴⁾

[67] 経に、「私が涅槃してから」と言うものから、「涅槃するであろう」と言うまでは、⁽¹⁴⁵⁾「聖なる声聞たちが最後に無上の仏を成就するであろう」とは、「仏がおられ、善友により無上の場所に転じていれば、そのように適切でも、仏がいない界で声聞などの種姓に心を起こした者たちは広大な菩薩行を聞かないようになり声聞の種姓に落ち、無余涅槃に入らないのか」と言う疑惑を取り除くためにこれが述べられ、そこでも最初の導入と、さらにまた仏になられたことと、その成就の理由とで、これが最初である。⁽¹⁴⁶⁾

[68] 経に、「また比丘たちよ、他の世間で」と言うものから「知恵を求め、生じる」と言うまでには、⁽¹⁴⁷⁾彼が仏を成就することが説かれており、世尊がこの界において涅槃を説いても他の国で衆生の利益をなされ、声聞たちもそこに生じ、そこに生まれても声聞の劫が成熟し、如来の心によっても守られ、そこに生まれることで悟りを授記している。⁽¹⁴⁸⁾

[69] 経に、「それからまた如来の」と言うものから「であると知るべきである」と言うまでには、⁽¹⁴⁹⁾それを成就させる理由が説かれており、その二乗も最後に大乘にまとめられ、涅槃することの外に涅槃はなく、二と三を説いたのも、衆生の能力が異なることから方便による解説したのに尽きるが、確実に二と三として存在しない。『大槃涅槃経』にも、「涅槃はどのようなものか。大槃涅槃はどのようなものか」と言う質問と、声聞と独覚が8万、6万、4万、2万、1万劫の間おられるその場所が涅槃である。聖なる法王のその場所が「大涅槃」と説かれている。⁽¹⁵⁰⁾

『妙法蓮華註』第8巻で、最後。⁽¹⁵¹⁾

[70] 経に、「比丘たちよ、何れかの時に」と言うものから「大きな禪定をとまなうことを見れば」と言うまでには、⁽¹⁵²⁾3種に分けられ、意味と譬喩とまとめである。最初にも2種があり、先に了義を説き、後に未了義を説いたものも総じて2種で、根の成熟の時と、一乗を解説したものとである。根の成熟も涅槃

の時を説いたものと、煩惱が尽き、清浄になることを説いたものと、三乗が煩惱から生じると説いたものと、空性の考察と、三昧に入定することで、三昧は、四禪と九禪から起き上がることと、入ることが説かれている。⁽¹⁵³⁾

[71] 経に、「比丘たちよ、如来」と言うものから「第3は言うまでもない」と言うまでには、一乗の意味が説かれており、『解深密経』に「乗が4種と説かれるのは了義で、一乗を説くことは導く意味である」と説いており、これにより菩提心から誤った者たちに反対の意味を示すのでここでこの一乗を了義と示している。⁽¹⁵⁵⁾

[72] 経に、「比丘たちよ、これは」と言うものから「涅槃を解説する」と言うまでには、⁽¹⁵⁶⁾これにより了義の意味の理由が説かれており、信仰が異なる衆生たちにそれぞれの意に応じて方便の法を示しており、弱い能力の衆生が5種の欲望から退くためだけに輪廻から退くことが説かれており、それから繰り返すので、一乗は、宝珠の生じる場所に入ることである。⁽¹⁵⁷⁾

[73] 経に、「このように、比丘たちよ、譬喩から」と言うものから「さらに成立している」と言うまでには、この譬喩により先に未了義の譬喩が説かれ、⁽¹⁵⁸⁾後に了義の譬喩を示し、その未了義にも譬喩が4種あり、苦痛を離れて解放される譬喩と、衆会の心が動く譬喩と、商人に多くの方便を説く譬喩と、鳥を見ることを説く譬喩とで、これは最初である。「500由旬」とは、5種の有情の輪廻である。「宝珠の島」とは、涅槃の島である。⁽¹⁵⁹⁾

[74] 経に、「それらから涅槃の特徴は1つである」と言うものから「彼らは解脱する」と言うまでで、「特徴」とは、⁽¹⁶⁰⁾仏世尊で、その功德も5つである。「明るい」とは、鋭根である。「賢い」とは、善悪の区別である。「知」とは、勝義と世俗の知である。「善」とは、一切の功德をもつことである。「道における解脱」とは、五趣からの解脱である。⁽¹⁶¹⁾

[75] 経に、「それらの多くの有情」と言うものから「引き返す」と言うまでには、⁽¹⁶²⁾これにより戻る譬喩が説かれており、大乘の成就である60劫の間難行の

菩薩行により疲労し、聖者の行により畏れ、小さな結果を努力しようと思うことである。⁽¹⁶³⁾

[76] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「城市を明らかに変化させる」と言うまでには、変化の城市を説いた譬喩で、それにも心に入るものと、城市を説いたものと、それを配置したことと、その城市の功德を説いたものとの4で、これが最初の2つと合わせられる。『撰大乘論』にも、「例えば天鼓は特に想がなく努力なく音を出すように、如来の悲心により衆生らを昼に3度夜に3度見ることも自然に成立する根により意図されている」と言う意味である。「100か200由旬」とは輪廻の場所と苦により何れかのもとの合わせられる。「城市」とは、禪定と三昧の城市で、大乘の涅槃そのものとの合わせられる。⁽¹⁶⁴⁾⁽¹⁶⁵⁾

[77] 経に、「彼はそれらの人を」と言うものから「その宝珠の島に行く」と言うまでには、⁽¹⁶⁶⁾そこに住することと、畏怖がないことと、城市に入る功德が説かれる。それに入る功德も、楽を得ることと、苦が寂靜になったことである。⁽¹⁶⁷⁾

[78] 経に、「それから比丘たちよ」と言うものから「涼しく思う」と言うまでには、⁽¹⁶⁸⁾疲れた者たちが休む譬喩が説かれており、それにも2種ある。先に有学の者たちが心を集中し、精進を起こしたことと、後に無学の者たちが解脱道に入り、有余涅槃となる死を離れるために城市に入る思いが起こされ、無学地の獲得を止めた者と道の究竟に至った者たちも越えたとか、⁽¹⁶⁹⁾涼しい想を起こしたことである。⁽¹⁷⁰⁾

[79] 経に、「特徴で休息を知ってから」と言うものから「あなたたちよ、認めなさい」と言うまでには、⁽¹⁷¹⁾2種の譬喩に対して、これは了義が説かれており、前者は変化が説かれ、後者は真実が説かれており、「変化の城市」とは2種の乗の場所で、その休む場所が休息場所に似ていることが説かれているが、「大乘の宝珠の生じる場所はそれから近い」と言うことを譬喩が説いている。⁽¹⁷²⁾

[80] 経に、「そのように比丘たちよ」と言うものから「捨てるべきである」と言うまでには、⁽¹⁷³⁾後の意味と合わせられ、前者は未了義と合わせられ、後者は

了義と合わせられ、輪廻と苦を越えて捨てることである。⁽¹⁷⁴⁾

[81] 経に、「それからこれらの衆生」と言うものから「適切でない」と言うまでには、⁽¹⁷⁵⁾これにより菩薩の難行に対して心が弱いことが説かれている。⁽¹⁷⁶⁾

[82] 経に、「如来は」と言うものから「2つの地を説いた」と言うまでには、⁽¹⁷⁷⁾譬喩と意味を合わせたもので、「二地」とは、二根による学処と、二智により入るべき地である。⁽¹⁷⁸⁾

[83] 経に、「比丘らよ、何れかの時に」と言うものから「巧みな方便である」と言うまでには、⁽¹⁷⁹⁾下の譬喩により了義と合わせられ、「なすべきこととなすべきでないこと」とは、生が残る身体である。生が残る身体は、梵行を行わないものは至らないことと合わせられる。「見て、考察しなさい」とは、苦と集の知恵に入ることである。⁽¹⁸⁰⁾

[84] 経に、「それから世尊により」と言うものから「その勝者に供養し、尊敬をなす」と言うまでには、⁽¹⁸¹⁾これ以後の49偈から39偈半と1偈により以前の原因が説かれ、その次により現在の結果が説かれる。⁽¹⁸²⁾

[85] 経に、「それから勝者は苦しみ」と言うものから「梵天の宮殿を震動させた」と言うまでには、⁽¹⁸³⁾法の解説の請願で、何れかの種と合わせられる。⁽¹⁸⁴⁾

[86] 経に、「東に100億の」と言うものから「その人の死そのものも知るべきである」と言うまでには、⁽¹⁸⁵⁾法の解説の請願と、真実を説いたものの解説と、衆生が利益を得ることである。⁽¹⁸⁶⁾

[87] 経に、「その法を解説するやいなや」と言うものから「それらの辺際に至らない」と言うまでには、⁽¹⁸⁷⁾衆生の利益を得ることが説かれている。⁽¹⁸⁸⁾

[88] 経に、「それらの16王子も」と言うものから「例えば、勇者よ、きれいな眼のあなたのように」と言うまでには、⁽¹⁸⁹⁾法の子の相続を思うことが説かれており、経に出ている通りに理解しなさい。⁽¹⁹⁰⁾

[89] 経に、「その勝者はそれらの思いを知ってから」と言うものから「比丘である長老よ、畏れてはならない」と言うまでは、⁽¹⁹¹⁾長行と合わせて理解しなさい

⁽¹⁹²⁾
い。

[90] 経に、「例えば僧院に適さないものを畏れる」と言うものから「悲惨な僧院を畏れ」と言うまでには、⁽¹⁹³⁾これ以後の19偈により結果を得ることと、導かれる意味を捨て、了義に入ることが説かれている。野獣の恐怖から解放されることが煩惱の種々なる業である。「水」とは、「如来の説かれたものにより息を吐く」と言われる。⁽¹⁹⁴⁾

[91] 経に、「数千万の有情が生じる」と言うものから「戻ることを喜ぶ」と言うまでには、⁽¹⁹⁵⁾戻る譬喩が説かれている。⁽¹⁹⁶⁾

[92] 経に、「それから賢くて理解のあるその人は」と言うものから「戻る」と言うまでには、⁽¹⁹⁷⁾変化の城市を整える譬喩である。⁽¹⁹⁸⁾

[93] 経に、「このように私の神通力により今」と言うものから「男性と女性を別にともない」と言うまでには、⁽¹⁹⁹⁾城市が明らかに変化するそのことが説かれており、「城市」とは涅槃の城市である。「家」とは空性の辺際で、経典からも、勝義の空性は家で、菩提支は花の莊嚴で、陀羅尼は中庭で、大法は林で、九定は水である。八解脱は池で、三解脱は玄関で、高く美しく飾ることは外道より勝れた真実の譬喩で、⁽²⁰⁰⁾真実の法が空性の知恵で、大悲は女性と見られる。

[94] 経に、「変化をなしてから、そこでこのように言う」と言うものから「入って、目的を明らかに速やかにしなさい」と言うまでには、⁽²⁰¹⁾入ることを記憶させることである。⁽²⁰²⁾

[95] 経に、「涅槃し、心に喜びを表しなさい」と言うものから「それからそれらはすべて辺際に行く」と言うまでには、⁽²⁰³⁾疲れて休む譬喩が説かれている。⁽²⁰⁴⁾

[96] 経に「すべての休息の在り方を知ってから」と言うものから「島に行くために精進を起すべきである」と言うまでには、⁽²⁰⁵⁾了義を示す譬喩である。⁽²⁰⁶⁾

[97] 経に、「比丘たちよ、そのように私も導いて」と言うものから「あなたがたはなすべきことをなした」と言うまでには、⁽²⁰⁷⁾これ以後、譬喩と意味を合わせたものと、⁽²⁰⁸⁾導かれた意味と了義を示し、これが最初である。

[98] 經に、「何れかの時にこの場所にいるが」と言うものから「この法の通りに正しい意味が解説される」と言うまでには、正しく示すことを説いている。⁽²⁰⁹⁾⁽²¹⁰⁾

[99] 經に、「偉大な仙人が三乗を説いた」と言うものから「仏になってから涅槃する」と言うまでには、「未了義を放り出し、了義に入る」と説かれている。⁽²¹¹⁾⁽²¹²⁾

[100] 經に、「導く者により説かれたものはこれと同じである」と言うものから「一切智者の知を獲得させる」と言うまでには、まとめが説かれている。⁽²¹³⁾⁽²¹⁴⁾

〈注〉

(1) 和訳箇所は、『丹珠爾（対勘本）：中華大藏經』第69巻, pp.740-761に相応するが、批判的校訂版のテキストを身延山大学東洋文化研究所の『法華経研究叢書』の一書として出版する予定である。なお、付録「漢文テキスト「化城喩品」の科文」は研究協力者金炳坤氏によるものである。

(2) 789b16: 三門分別一來意二釋名三解妨。

(3) 789b16-21: 來意有四 一者上中根類聞法得記下根之徒猶未明解故陳過去已結大乘之緣并說現在小果化城之喩陳往因令其證實述今果令其捨權遣生覺解方可爲記故此品來。

(4) 789b21-27: 二者論解爲對治七種具足煩惱性衆生有七種增上慢中第四有定人實無而有增上慢以有世間三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想對治此故說化城喩又云第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者諸禪三昧城過彼城已令入大涅槃城故。

ただし、チベット語訳は続く解説部分の翻訳を欠く。

789b27-790a5: 有定人者彼已得定諸有學凡夫人今說往事令憶念故此所起慢或欲界分別或上界煩惱三昧城者謂有學凡夫專心所求在無學身盡無生智後世間禪定所變解脫離能變無總名三昧此定有漏名爲世間此中意說佛說三事名大般涅槃三乘同得擇滅解脫即是無學解脫道中所證生空理由此後時惑苦不生名爲解脫佛說此解脫名爲化城生空智證名爲暫入以息衆苦故言方便入涅槃城後引至寶所方至大涅槃城二乘之人加行智求變作此相至於無學解脫道中正證解脫都無分別種種之想出解脫道後世間定心重緣所得以心麤故不知真智所證之法但見加行所求涅槃解脫相狀便謂涅槃謂有實滅豈非彼解是世間定故言以有世間三昧實無涅槃而生涅槃想凡夫有學聞此假解不識知故謂有實涅槃起堅執心作意欣趣故今破之說彼所證猶如化城尙爲不實不應趣求況在無學假所變耶如二乘人所起四倒正智證生空猶未起執後時觀前正智行相不親得故乃見加行所求行相便謂爲眞遂起四倒此亦如是無漏心及世

間定皆是法執出彼心後方起執故此護法義若安慧師即無學位解脫道等諸無漏心世間定心皆有法執所證擇滅名爲化城餘人求之理增上慢論說具足煩惱性衆生所起故非無學又有釋言此是世間凡夫所執所得世間三摩跋提六行所得假非擇滅謂眞涅槃佛說二乘無學所得擇滅涅槃方便令入猶如化城中路息苦擬向寶所尚非眞滅況凡夫所得世間假解三昧執實滅耶有學之人不起此執凡夫有故下言導師知無疲倦即滅化城云向者大城是我化作說化滅化破執二乘涅槃實城爲滅凡夫所執城故此中應如護法等解。

- (5) 790a5-14: 三者十無上中第二示現行無上故說大通智勝如來本事大乘菩提難得行亦難成非如二乘菩提疾得行亦易修故說大通智勝佛十劫坐道場方得菩提事此爲文殘說古事故或說大通佛事者說佛自身彼時修行爲十六王子今始得菩提又諸聲聞彼時發心今時方熟故大因行非卒修成名行無上不說大通佛之行也即將說今要先說古雖以今果爲品號其因亦在其中明故此品來。
- (6) 790a14-18: 四者十無上中第三示現增長力無上故說商主喩前說化城知非眞滅未說商主能長商人能引至於佛果寶所今此說之故此品來此乃義殘非文殘。
ただし、チベット語訳は続く「釈名」の翻譯を欠く。
790a18-22: 釋名者禦寇安神之所曰城本無而有曰化禦寇者息生死之疲安神者證恬寂之樂故喩於城佛假權施名之爲化城即是化名曰化城今是喩法此品廣明名化城喩品。
- (7) 790a22-29: 解妨難者問此品所明乃有二義一大通往事即行無上二說化城今事即增長力無上何故唯以化城爲名不以佛事爲目答正教之說本除生病生有本無而有增上慢執非擇滅爲眞今說擇滅爲化除之令捨漸進寶所故以化城爲品不以佛事爲品。
ただし、チベット語訳は以下の『正法華經』の「往古品」のタイトルに対する言及の翻譯を欠く。
790a29-b4: 正法華名往古品謂顯過去佛曾教化發大乘種令其憶念爲今熟因望其意解引入大乘非正破病故今此經不以往古爲品號又化城果今現得大通事在往因以顯果爲品名不以隱因爲品稱亦無失也。
- (8) 前稿と同じように、『法華經』の引用箇所に対して、梵（ケルン）、藏（中村瑞隆）、漢（鳩摩羅什訳、『大正新脩大藏經』）の該当箇所をあげておく。
[1] Skt. 156.1-2; Tib. 156.1-2; Chin. 22a19-20.
- (9) 790b5-27: 【1】經佛告諸比丘至阿僧祇劫（22a19-20） 贊曰下第三周爲下根說准前二周亦爲四段此品佛以喩正化第二後品之初滿慈領悟第三後品之中次領悟後云爾時佛告諸比丘汝等見是下佛重述成第四諸比丘富樓那亦於七佛下爲之授記初文有二初說宿因令念退大以就小後諸比丘若如來自知涅槃時到衆又清淨下顯今果令知捨權以取實初是說古因緣今自了達往修大因退住小果論名行無上說大通如來本事後是述今得果論名爲破有定人實無而有增上慢又爲示現增長力無上故說商主

喩説初發大心令今取大果次説後果爲化令今捨小果由此分二初文有二初説過去因緣結會佛自身後諸比丘我等爲沙彌時各各教化下明過去結緣會弟子事此意聰明過去會化已結大乘之緣令生信解故爲此解初文復二初一長行一偈頌明大通佛去今久近後佛告諸比丘大通智勝佛壽下正明彼事初長行有二初明彼佛久近後顯已能見初中復二初總告後問答初中有四一時二名三國四劫此初也。

- (10) [2] Skt. 156.2-5; Tib. 156.2-5; Chin. 22a20-23.
- (11) 790b28: [2] 經爾時有佛至劫名大相 (22a20-23) 贊曰此告後三。
- (12) [3] Skt. 156.5-10; Tib. 156.5-10; Chin. 22a23-26.
- (13) 790b29-c3: [3] 經諸比丘至盡地種墨 (22a23-26) 贊曰下問答有三一問二答三明久近問中有二初按量後問此初也種音之隴反磨音莫箇反若莫波反應作摩摩研也鬼作魔尼作麼病作磨都無磨作摩音。
- (14) [4] Skt. 157.1-2; Tib. 157.1-2; Chin. 22a27-28.
- (15) 790c4: [4] 經於汝等意至不也世尊 (22a26-28) 贊曰此問及答。
- (16) [5] Skt. 157.2-8; Tib. 157.2-7; Chin. 22a28-b2.
- (17) 790c5-8: [5] 經諸比丘至阿僧祇劫 (22a28-b2) 贊曰此明久近下前塵盡取此著塵不著塵界總以爲墨一塵一劫彼佛滅度更多於彼其抹者以手摩也。
- (18) チベット語訳は、以下の引用箇所 (Chin. 22b2-3) の解説もここに1つにまとめている。
- 790c9-22: [6] 經我以如來至猶如今日 (22b2-3) 贊曰此顯已能見宿命智慧眼見故問釋迦修行不越三祇何故塵劫極多彼時猶稱王子答意趣有四一平等意趣謂佛說言我於爾時曾名勝觀法身平等故二別時意趣謂願生極樂皆得往生暫聞無垢月光佛名定於菩提得不退轉三別義意趣謂說諸法皆無自性無生滅等本來涅槃四衆生意樂意趣謂於一善根或讚或毀令增進故今此依於平等意趣說餘佛事即是我身身平等故若不爾者云何乃言爾許劫數又善心相續劫滿三祇諸心通論何妨爾劫在彼佛時猶稱王子又依晝夜月時年何妨許時釋迦自身三僧祇劫內。
- (19) [6] Skt. 157.9-11; Tib. 157.8-10; Chin. 22b3-6.
- (20) 790c23-25: [7] 經爾時世尊至名大通智勝 (22b3-6) 贊曰七頌分二初五頌頌久時後二頌頌能見初復分二初一頌告佛名後四頌告劫數此初也。
- (21) [7] Skt. 157.11-158.6; Tib. 157.10-158.6; Chin. 22b7-14.
- (22) 790c26-27: [8] 經如人以力磨至如是無量劫 (22b7-14) 贊曰此告劫數。
- (23) [8] Skt. 158.7-10; Tib. 158.7-10; Chin. 22b15-18.
- (24) 790c28-29: [9] 經如來無礙智至通達無量劫 (22b15-18) 贊曰此頌能見也。
- (25) [9] Skt. 158.11-12; Tib. 158.11-12; Chin. 22b19-20.
- (26) 790c30-791a7: [10] 經佛告諸比丘至那由他劫 (22b19-20) 贊曰下第二段正明彼事以下諸長行方頌有文初會自身事文有四第一佛壽成道第二其佛未出家時有十

- 六子下轉正法輪第三爾時十六王子皆以童子出家下子繼傳燈第四諸比丘我今語汝彼佛弟子十六沙彌下會成今佛初文有三一明佛壽二法難得三說得道此初也。
- (27) [10] Skt. 158.13-159.7; Tib. 158.13-159.6; Chin. 22b20-23.
- (28) 791a8-24: **[11]** 經其佛本坐道場至猶不在前 (22b20-23) 贊曰下明法難得有四一不現前二諸天敷坐三散華四作樂長時此初也報身成道理實爲難化身成道何妨化現今他報身示相起也論云欲顯菩提難得故依華嚴經有十事故坐於道場始從震動一切佛刹乃至自善根力悉能受持一切衆生故坐道場破諸魔軍亦有十義始從五濁惡世衆生互相征伐欲顯菩薩功德力故乃至順五濁世諸衆生故示現降魔不爾魔怨有何勝力與大菩薩如來競力又釋迦佛破魔軍諸部不同有說成道後方破魔軍依涅槃經亦作此說有說破魔後方成道經文現有此二說故此佛破魔後方成道此事不定顯示現故又彌勒佛於出家日即得成道釋迦苦行先經六年今此成道十劫空坐皆是示相不同不可一其所以。
- (29) [11] Skt. 159.8-10; Tib. 159.7-9; Chin. 22b23-25.
- (30) 791a25-30: **[12]** 經爾時初利至三藐三菩提 (22b23-25) 贊曰二敷坐勝天王般若說諸天各獻一座佛爲受之坐取菩提以神力故合爲一座令彼諸天各唯見佛納已之座以取菩提發心歡喜不見納受餘座而坐故此亦言諸天作座非共造一。
- (31) [12] Skt. 159.10-160.2; Tib. 159.9-160.2; Chin. 22b25-28.
- (32) 791b1-2: **[13]** 經適坐此座時至常雨此華 (22b25-28) 贊曰三散華華積如須彌明知他受用身也。
- (33) [13] Skt. 160.2-6; Tib. 160.2-4; Chin. 22b29-c1.
- (34) 791b3-5: **[14]** 經四王諸天至亦復如是 (22b29-c1) 贊曰四作樂伎音渠倚反藝也女樂作妓有作伎立也經文乘便故說乃至終恒樂供養。
- (35) [14] Skt. 160.7-8; Tib. 160.5-7; Chin. 22c2-3.
- (36) 791b6: **[15]** 經諸比丘至三菩提 (22c1-3) 贊曰第三說得道。
- (37) [15] Skt. 160.8-10; Tib. 160.7-8; Chin. 22c3-4.
- (38) 791b7-20: **[16]** 經其佛未出家時至名曰智積 (22c3-4) 贊曰下第二大段轉正法輪有二初供養請轉後爾時大通智勝如來受十方諸梵天請已下許可爲轉初文有二初明十六子供養請轉後明梵天王供養請轉親族現前故非親族不現前故初文又二初詣佛供養後請轉法輪初文復二初明詣佛後明禮讚詣佛有五一一明佛子二明往詣三母送四祖送五詣意此初也他受用身有父母等鼓音王經說阿彌陀佛父名月上母名殊勝妙顏有子有魔等化七地已前有分段死故有父母等化八地已有變易生理無此事不死生故他受用身得與金輪俱出故此佛祖轉輪聖王。
- (39) [16] Skt. 160.10-161.2; Tib. 160.8-161.2; Chin. 22c4-6.
- (40) 791b21: **[17]** 經諸子各有至往詣佛所 (22c4-6) 贊曰二詣佛也。
ただし、チベット語訳は以下の注釈 (Chin. 22c7-9, 9-10) の翻訳を欠く。

- 791b22-24: 【18】 經諸母涕泣至隨至道場（22c7-9） 贊曰三母送四祖送涕泣者他禮反目出淚曰涕無聲出淚曰泣。
- 791b25: 【19】 經咸欲親近至尊重讚歎（22c9-10） 贊曰五詣意也。
- (41) [17] Skt. 160.10-161.2; Tib. 160.8-161.2; Chin. 22c10-14.
ただし、チベット語訳は、次の経文に対する解説文もここに含めて解説している。
- (42) 791b26-30: 【20】 經到已頭面至善哉吉無上（22c10-14） 贊曰第二禮讚有二一身禮二語讚八頌爲三初一頌半讚佛願滿勝德次二頌讚佛修因勝德後四頌半申歸禮意此初也吉謂吉祥善事滿故。
- (43) [17] Skt. 161.8; Tib. 161.8; Chin. 22c15-18.
- (44) 791c1-18: 【21】 經世尊甚希有至安住無漏法（22c15-18） 贊曰二讚修因勝德一坐十小劫者華嚴經說有十種坐一轉輪王坐與十善故二四天王坐欲於一切世界諸佛正法行自在故三帝釋坐於一切衆生行自在故四梵天王坐自心他心得自在故五師子坐分別演說甚深義故六正法坐欲明總持諸力辨故七堅固三昧坐究竟大菩提故八大慈坐令惡心者悉歡喜故九大悲坐能忍一切諸苦惱故十金剛坐降伏衆魔諸外道故今此乃是堅固三昧金剛坐故靜然者身定也心擔怕者心定也擔音徒濫反說文安也靜也謂擔然安樂切韻靜應爲擔無味作淡恬靜作愜擔玉篇擔音徒敢反靜也安也有作愜說文徒甘反憂也非此中義字書作俛亦徒濫反怕音疋白反亦靜也玉篇無爲也擔怕則是安靜之義有作淡泊無味也非此中義。
- (45) [18] Skt. 161.12-13; Tib. 161.12-13; Chin. 22c19-20.
- (46) 791c19-21: 【22】 經今者見世尊至稱慶大歡喜（22c19-20） 贊曰三有四頌半申歸禮意有二初一頌標佛得道我等獲益後三頌半釋其所由此初也。
- (47) [19] Skt. 162.1-4; Tib. 162.1-4; Chin. 22c21-24.
- (48) 791c22-28: 【23】 經衆生常苦惱至永不聞佛名（22c21-24） 贊曰下釋所由有二初二頌明諸衆生不近善友輪迴受苦後一頌半遇益故歸禮此初也常苦苦諦盲冥集諦不識苦盡道諦不求解脫滅諦於此四諦都不能識天衆損減從闍入闍不聞佛名冥音莫經反暗也玉篇莫定反夜也昧也冥冥者蔽人目令無所見。
- (49) [20] Skt. 162.5-6; Tib. 162.5-6; Chin. 22c25-27.
- (50) 791c29-30: 【24】 經今佛得最上至歸命無上尊（22c25-27） 贊曰遇益故歸禮。
- (51) [21] Skt. 162.7-11; Tib. 162.7-12; Chin. 22c28-23a1.
- (52) 792a1-3: 【25】 經爾時十六王子至諸天人民（22c28-23a1） 贊曰此下第二請轉法輪初長行後偈頌此初也安隱與樂憐愍拔苦。
- (53) [22] Skt. 162.12-13; Tib. 162.13-14; Chin. 23a1-3.
- (54) 792a4-7: 【26】 經重說偈言至願爲世間說（23a1-3） 贊曰下四頌半分三初一頌佛具內外德故請次一頌半有大利益故請後二頌明佛識達故請此初也倫匹也等也。

- (55) [23] Skt. 163.1-2; Tib. 163.1-2; Chin. 23a4-6.
- (56) 792a8-9: **[27]** 經度脱於我等至衆生亦復然 (23a4-6) 贊曰二有大利益故請。
- (57) [24] Skt. 163.3-4; Tib. 163.3-4; Chin. 23a7-10.
- (58) 792a10-14: **[28]** 經世尊知衆生至當轉無上輪 (23a7-10) 贊曰三明佛識達故請此知五種一所念即欲樂勝解二所行道遍趣行三智慧力即根勝劣四宿命即宿住力五業即自業智力其欲樂即所念修福即業故略舉此攝餘五力。
- (59) [25] Skt. 163.5-8; Tib. 163.5-8; Chin. 23a11-13.
- (60) 792a15-18: **[29]** 經佛告諸比丘至六種震動 (23a11-13) 贊曰下梵天供養請轉法輪有二初神光動照後供養請轉初文有三初動十方世界次光照幽冥後動照梵宮此初也。
- (61) [26] Skt. 163.8-13; Tib. 163.8-13; Chin. 23a13-15.
- (62) 792a19-20: **[30]** 經其國中間至忽生衆生 (23a13-15) 贊曰光照幽冥即二世界鐵圍山間。
- (63) [27] Skt. 163.13-164.3; Tib. 164.1-3; Chin. 23a15-17.
- (64) 792a21-22: **[31]** 經又其國界至勝諸天光 (23a15-17) 贊曰動照梵宮爲供請之漸。
- (65) [28] Skt. 164.4-10; Tib. 164.4-9; Chin. 23a17-21.
- (66) 792a23-30: **[32]** 經爾時東方至共議此事 (23a17-21) 贊曰下供養請轉大文分五一東方二東南方三南方四例六方五上方除後二方餘一一中文皆分四一觀光驚議二尋光詣佛三禮讚請轉四默然許之初文有二初衆梵驚問後一天請求此初也此皆通四禪梵王或唯初禪請轉法輪梵福量故此文有三一光二念三議。
- (67) [29] Skt. 164.11-165.2; Tib. 164.10-165.2; Chin. 23a21-26.
- (68) 792b1-3: **[33]** 經時彼衆中至遍照於十方 (23a21-26) 贊曰此一天請求諸天之中具威德者將生之時光明先現故此疑言爲大德天生。
- (69) [30] Skt. 165.3-6; Tib. 165.3-5; Chin. 23a27-28.
- (70) 792b4-6: **[34]** 經爾時五百至推尋是相 (23a27-28) 贊曰二尋光詣佛有二初持宮華以推覓後見佛衆以忻然此初也。
- (71) [31] Skt. 165.6-166.2; Tib. 165.9-166.2; Chin. 23a29-b3, 3-5, 5-7.
漢文では3つ (**[35]** **[36]** **[37]**) に分けられているが、チベット語訳では1つにまとめられている。
- (72) 792b7-8: **[35]** 經見大通智勝至請佛轉法輪 (23a29-b3) 贊曰見佛衆以忻然也。
792b9-11: **[36]** 經即時諸梵天王至高十由旬 (23b3-5) 贊曰下第三段禮讚請轉有二初供養後請轉初長行有二初歸禮散華後獻宮請納此初也。
792b12: **[37]** 經華供養已至願垂納受 (23b5-7) 贊曰此請納安處。
- (73) [32] Skt. 166.3-10; Tib. 166.3-10; Chin. 23b7-12, 13-16.
ただし、漢文は偈の前の導入文から始まるが、チベット語訳は偈から始まる。

漢文では2つ（【38】【39】）に分けられているが、チベット語訳では1つにまとめられている。これは、『法華経』の羅什訳では4偈で説かれているものが、対応するチベット語訳では3偈で説かれているために、混乱が生じたのであろう。

- (74) 792b13-15: 【38】 經時諸梵天王至普皆蒙饒益 (23b7-12) 贊曰四頌分三初二頌讚五德次一頌陳來由後一頌請納受此初也。
792b16-17: 【39】 經我等所從來至唯願哀納受 (23b13-16) 贊曰初頌來由後頌請納。
- (75) [33] Skt. 166.11-167.8; Tib. 166.11-167.8; Chin. 23b17-21.
- (76) 792b18-19: 【40】 經爾時諸梵天王至度苦惱衆生 (23b17-21) 贊曰此請轉法輪。
- (77) [34] Skt. 167.9; Tib. 167.9; Chin. 23b22.
- (78) 792b20-27: 【41】 經爾時大通至默然許之 (23b22) 贊曰第四大段佛默然許問何故涅槃時默然不受他供今者默然遂許他說古解以佛顏有舒斂請者覺許不許又云以佛身光表知受與不受又云佛初成道時自唱號言凡時默然受請涅槃時默然是不受請又受食理須呪願默然知佛不許許說默已順請不假出言而許。
- (79) [35] Skt. 167.10-15; Tib. 167.10-15; Chin. 23b22-25.
- (80) 792b28-29: 【42】 經又諸比丘至共議此事 (23b22-25) 贊曰第二東南方大文亦四初衆梵驚議。
- (81) [36] Skt. 167.15-168.10; Tib. 167.15-168.10; Chin. 23b25-c3.
- (82) 792b30-c1: 【43】 經時彼衆中至度脫苦衆生 (23b25-c3) 贊曰此一天請求。
- (83) [37] Skt. 168.11-169.9; Tib. 168.11-169.8; Chin. 23c4-8, 9-13.
ただし、漢文では2つ（【44】【45】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。
- (84) 792c2-4: 【44】 經爾時五百至請佛轉法輪 (23c4-8) 贊曰第二尋光詣佛有二初持宮華以推覓後見佛衆以忻然。
792c5-7: 【45】 經時諸梵天王至願垂納受 (23c9-13) 贊曰下第三段禮讚請轉有二初供養後請轉此長行供養。
- (85) [38] Skt. 169.10-13; Tib. 169.9-12; Chin. 23c13-16.
- (86) 792c8-12: 【46】 經爾時諸梵天王至我等今敬禮 (23c13-16) 贊曰四頌半讚分四一頌讚禮一頌半歎希有一頌歎爲眼目一頌歎爲慈父此初也迦陵頻伽妙音鳥也以聲柔軟清亮哀雅故以爲喻。
- (87) [39] Skt. 169.14-15; Tib. 169.13-14; Chin. 23c17-19.
- (88) 792c13-14: 【47】 經世尊甚希有至諸天衆減少 (23c17-19) 贊曰歎希有也。
- (89) [40] Skt. 170.1-4; Tib. 170.1-4; Chin. 23c20-23.
- (90) 792c15-16: 【48】 經今佛出於世至今得值世尊 (23c20-23) 贊曰初一歎眼目後一

頌慈父。

- (91) [41] Skt. 170.5-171.2; Tib. 170.5-171.2; Chin. 23c24-24a1.
- (92) 792c17-19: 【49】經爾時諸梵天王至忍善者增益（23c24-24a1） 贊曰此請轉也歎佛生益忍善者增益謂入聖道其義可知。
- (93) [42] Skt. 171.3; Tib. 171.3; Chin. 24a2.
- (94) 792c20-21: 【50】經爾時大通至默然許之（24a2） 贊曰第四大段佛默然許。
- (95) [43] Skt. 171.4-14; Tib. 171.4-13; Chin. 24a2-11.
- (96) 792c22-24: 【51】經又諸比丘至爲佛出世間（24a2-11） 贊曰第三南方准前有四此觀光驚議有二初衆梵驚議後一天請求。
- (97) [44] Skt. 172.1-173.6; Tib. 172.1-173.6; Chin. 24a12-17, 17-29.
ただし、漢文では2つ（【52】【53】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられ、解説文の翻訳も省略されている。
- (98) 792c25-27: 【52】經爾時五百至轉法輪（24a12-17） 贊曰第二尋光詣佛有二初持宮華以推覓後見佛衆以忻然。
792c28-30: 【53】經時諸梵天王至唯願垂納受（24a17-29） 贊曰下第三段供養請轉中初供養後請轉此初也初二頌半歎佛後一頌請受。
- (99) [45] Skt. 173.7-177.15; Tib. 173.7-177.15; Chin. 24b1-c22. ただし、チベット語訳では、ここに大きな翻訳の欠落がある。
- (100) チベット語訳は、大幅に省略（【54】～【65】）されている。漢文テキストを『法華經』の対応箇所とともに示すと、次の通りになる。
Skt. 173.7-174.4; Tib. 173.7-174.4; Chin. 24b1-8.
793a1-2: 【54】經爾時諸梵天王至當演深遠音（24b1-8） 贊曰請轉中初長行後偈頌文意可知。
Skt. 174.5; Tib. 174.5; Chin. 24b9.
793a3-4: 【55】經爾時至默然許之（24b9） 贊曰第四大段佛默然許。
Skt. 174.6-7; Tib. 174.6-7; Chin. 24b9-10.
793a5-6: 【56】經西南方至亦復如是（24b9-10） 贊曰第四例餘六方事意同前恐繁故例。
Skt. 174.8-175.8; Tib. 174.8-175.7; Chin. 24b10-19.
793a7-9: 【57】經爾時上方至爲佛出世間（24b10-19） 贊曰第五上方有三無第四許此即觀光驚議有二初衆梵驚議後一天請求。
Skt. 175.9-15; Tib. 175.8-14; Chin. 24b20-24.
793a10-12: 【58】經爾時五百至轉法輪（24b20-24） 贊曰第二尋光詣佛有二初持宮華以推覓後見佛衆以忻然。
Skt. 175.15-176.4; Tib. 175.14-176.3; Chin. 24b24-29.

793a13-15: 【59】經時諸梵天王至願垂納處（24b24-29） 贊曰下第三段供養請轉有二初供養後請轉初中又二此長行也。

Skt. 176.5-11; Tib. 176.4-9; Chin. 24b29-c5.

793a16-24: 【60】經時諸梵天王至廣度於一切（24b29-c5） 贊曰十頌半分四初七頌半讚佛德次一頌見佛生喜次一頌請納後一頌迴向初中有二初二頌標後五頌半釋此初也初頌歎能拔苦後頌歎能與樂免音無遠反引也作挽有作勉亡辨反勗勵也國語云父勉其子兄勉其弟猶勤強也萌音莫耕反芽也始也冥昧貌衆無知也漢書氓群黎也涅槃名甘露門謂聖道或理名甘露教名爲門。

Skt. 176.12-177.2; Tib. 176.10-177.2; Chin. 24c6-9.

793a25-28: 【61】經於昔無量劫至死多墮惡道（24c6-9） 贊曰下五頌半釋中有二初四頌半生死輪迴後一頌釋佛能拔初中又二初二頌受苦果後二頌半行惡因此初也。

Skt. 177.3-7; Tib. 177.3-7; Chin. 24c10-14.

793a29-b4: 【62】經不從佛聞法至常墮於惡道（24c10-14） 贊曰此行惡因意可知也文有二初二〔一の誤り〕頌半在家行惡行後一頌外道行惡行樂謂人天樂果樂想者謂樂因又樂者所取樂境樂想者能取樂之想又樂謂樂受自體樂想謂苦治樂謂寒熱等暫息滅時假名樂故。

Skt. 177.8-9; Tib. 177.8-9; Chin. 24c15-16.

793b5-6: 【63】經佛爲世間眼至故現於世間（24c15-16） 贊曰此一頌釋佛能拔。

Skt. 177.10-11; Tib. 177.10-11; Chin. 24c17-18.

793b7-8: 【64】經超出成正覺至喜歎未曾有（24c17-18） 贊曰二明見佛生喜。

Skt. 177.12-15; Tib. 177.12-15; Chin. 24c19-22.

793b9-10: 【65】經我等諸宮殿至皆共成佛道（24c19-22） 贊曰第三段一頌請納第四段一頌迴向。

(101) [46] Skt. 178.1-13; Tib. 178.1-14; Chin. 24c23-29.

(102) 793b11-12: 【66】經爾時五百至無量劫習法（24c23-29） 贊曰此讚請轉也一頌讚一頌請。

(103) [47] Skt. 178.14-179.1; Tib. 178.15-17; Chin. 25a1-2.

(104) 793b13-25: 【67】經爾時大通智勝如來至十二行法輪（25a1-2） 贊曰上明供養請轉下第二段明許可爲轉有四一標許可爲轉二明餘所不能三彰所轉之法四顯生聞獲益此初也三轉有二一自二他今爲他轉非佛自轉此苦聖諦名示相轉此應遍知是勸修轉此已遍知是作證轉此行法輪以移動運是轉義故是一一轉令聞法者發生無漏眞聖慧眼隨其次第於去來今苦諦之中生智明覺如是一轉總別四行三轉諦諦皆有十二行相然數等故但說三轉十二行相三轉如次顯示令人見修無學等三如前**第四卷疏中解**。

- (105) チベット語訳では、次の漢文の解説は項目立てがなされていないが、これは『法華経』のチベット語訳において前項の経文との前後関係が明確でないことに起因している。

Skt. 179.1-2; Tib. 179.1-2; Chin. 25a2-3.

793b26-27: 【68】 經若沙門至所不能轉 (25a2-3) 贊曰二明餘所不能未正證故唯佛可爲一切師故知一切故。

- (106) [48] Skt. 179.2-4; Tib. 179.2-3; Chin. 25a3-4.

- (107) 793b28-c2: 【69】 經謂是苦至是苦滅道 (25a3-4) 贊曰下彰所轉輪之境於此生智名行法輪法輪境有二一四諦二十二緣此初也且舉示相餘例可知四諦略以五門分別一出體二釋名三廢立四釋妨五諸門。

793c2-794a14: 出體者對法等說有情世間及器世間諸有漏法性逼迫故皆是苦諦集有二義一招感異熟無記果義對法等說謂諸煩惱及所起業名爲集諦唯識等說十二支中五亦集諦攝業煩惱性故餘無記法皆非集諦然唯說愛爲集諦者由最勝故二爲因能得有漏果義即諸有漏在內身中三性諸法能爲依因有異熟者皆是集諦瑜伽等說十二支中逆觀老死有二種因一者龜生謂即生支二者細生謂愛取有乃至觀前齊識退還此等皆名老死之集故知依因無記等法亦名爲集不說非支亦名爲集眞如擇滅不動想受滅諸無爲名爲滅諦對法論說眞如聖道煩惱不生名爲滅諦此說滅依能滅滅性正智所證眞如境上有漏法滅假實合是滅諦之相無漏五蘊名爲道諦對法等說資糧道加行道見道修道究竟道皆名道諦依道自性及道眷屬以顯道諦由此四諦攝諸法盡故涅槃經迦葉問言如佛一時入中首林取小樹葉告諸比丘我已所說如手中葉所未說法如林中葉而言四諦攝諸法盡若攝盡者則是已說一切法盡云何言未說如林中葉若不攝盡者應有五諦世尊告言四諦攝盡然總說言此是苦諦二乘不能知分別諸苦有無量相非諸聲聞緣覺所知乃至道諦亦復如是此中意說然雖四諦攝諸法盡巨細分別二乘等不知故言未說非有五諦依顯顯實眞如亦是滅諦所攝故對法言滅性正是滅諦所攝涅槃亦說四諦所攝故言二乘有苦有諦而無有實菩薩具有餘三亦然廢詮談旨即非滅諦故瑜伽中四諦之外說非安立諦上依種類總說四諦若依法體有龜有妙能知之智有上有下勝鬘依此說有八諦謂有作四聖諦無作四聖諦如是八聖諦非二乘所知即新翻經云安立諦非安立諦有作四聖諦者分段生死十二因緣名苦煩惱及業名集擇滅名滅生空智品名道無作四聖諦者變易生死五蘊名苦所知障名集無住涅槃名滅法空智品名道如前已說今依總相或依分段轉四諦輪爲二乘故。

794a14-24: 釋名者四者是數諦者實義唯聖知實故名四聖諦苦眞是苦更無異苦等五十五云諦義云何如所說相不捨離義由觀此故到清淨究竟義是諦義帶數釋也苦者逼迫煩惱所生義集者招感能生苦諦義滅者寂靜義彼俱寂靜義道者通因能成三義三義者此中苦事苦理苦如乃至道諦有三亦爾苦事名諦持業釋餘二名諦依主釋理如二種與其苦事雖非一異然此皆非逼迫等故。

794a24-b1: 廢立者**九十五**云苦諦如諸病體集諦如諸病因滅諦如病生已而得除愈道諦如病除已令後不生諸有病者詣良醫所但應尋求爾所正法諸有良醫亦但應授爾所正法是故更無第五聖諦諸佛如來拔大毒箭無上良醫亦但宣說爾所正法又如療病者知病病因病除之法觀生死苦苦因苦滅滅法亦爾故復說言趣苦滅行。

794b1-16: 釋妨難者**五十五**說何因故說知苦斷集證滅修道四差別耶答由彼苦諦是四顛倒所依處故為除顛倒故應遍知苦既遍知已即遍知集由彼集諦苦諦攝故雖遍知苦仍為集諦之所隨逐故須更說永斷集諦言觸證者是現見義由於滅諦現前見故不生怖畏愛樂攝受是故須說觸證滅諦若勤修道乃能成辦所說三義是故次說修習道諦何故四諦如是次第由此故苦為初如此故苦為次此二攝黑品究竟由此故樂為第三如此故樂為第四此二攝白品究竟譬如重病病因病愈良藥又如遭苦次第建立聖諦如諸世間曾所遭苦即於此處先發作意次於遭苦因次於苦解脫後於解脫方便發起作意。

794b16-c1: 諸門分別者以十門分別一幾蘊所攝三諦五蘊更互相攝滅諦不爾彼寂靜故二誰各幾行答各四如次謂無常苦空無我因集生緣滅靜妙離道如行出三何故苦諦為四行觀為除四倒無常除常到苦除二倒謂樂淨倒空無我除我倒集諦四觀除四愛故由依常倒起後有愛次依樂淨二倒起貪喜俱行愛及彼彼希樂愛次依我倒起獨愛滅為四觀四種愛滅之所顯故道為四觀由能證彼四愛滅故四誰解脫門攝幾行五入諦現觀有幾種六三乘觀諦有何差別七此四諦為世俗為勝義**五十五**涅槃唯勝義**六十四**對非安立唯世俗攝實通二種八諸諦相攝九苦有幾種餘三亦爾十虛空非擇滅何諦所攝並如**瑜伽對法唯識顯揚等**抄說恐繁故止。

(108) [49] Skt. 179.4-13; Tib. 179.3-12; Chin. 25a4-8.

ただし、漢文では2つ（【70】【71】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられ、大幅に省略されている。

(109) 794c2-6: 【70】經及廣說至憂悲苦惱 (25a4-8) 贊曰下明十二緣起此有雜染清淨雜染清淨皆有順逆觀此中有二舉雜染順觀及清淨順觀例雜染逆觀及例清淨逆觀此即染順觀也生死相生故例染逆觀。

(110) 漢文は、「無明」以下 (Chin. 25a8-12) の解説において、『成唯識論』などを引用して中国の唯識学派における十二縁起の解釈を論じているが、チベット語訳はそれらの翻訳を行わず、十二縁起の一般的な解説を行うだけである。

794c7-10: 【71】經無明滅至憂悲苦惱滅 (25a8-12) 贊曰此清淨順觀初斷生死故例逆觀也十二縁起以六門分別一出體二釋名三縁相四依世五諸縁生攝六染淨順逆。

794c10-795a27: 出體者無明支體煩惱障中正取分別及兼任運患癡為體**成唯識云**此中無明唯取能發正感後世善惡業者又云正發業者唯見所斷助者不定能發行者方是此支通相應不共纏及隨眠行支體通善及不善身語意業唯感總報及通感總別二業為性唯別報業則非行支故**唯識云**即彼所發乃名為行由此一切順現受業別助當業皆

非行支亦通現種色思爲體識支唯取第八異熟識種爲體故唯識云此中識種謂本識因唯取行支所集異熟第八識種初結生故總異熟故唯在種位不取現行有處說通前六識身汎明一切識身爲論及依當來現起分位說有現行乃至受支亦復如是名色支體成唯識云除後三因餘因皆是名色種攝後之三因如名次第即後三種此說五支不相雜亂於一剎那爲行所集緣起支說謂異熟六根種名六處支異熟觸受種名觸受支除本識種及此三種餘諸異熟蘊種皆名色支契經又說名謂非色四蘊色謂羯刺藍等者依當起時分位前後於因中說雜緣起支不爾如何得通五蘊或汎通說一切名色唯識又依雜體說云或名色種總攝五因於中隨勝立餘四種六處與識總別亦然愛支唯是中下品貪此雖通緣內外二果諸論多取緣外境愛增上果生取支通用一切煩惱以爲自體全界煩惱皆結生故若能取若所取若所爲取所爲取中隨順煩惱不取餘法有處唯說愛增名取誰識會云雖取支中攝餘煩惱而愛閏勝說是愛增且依初後分愛取二實攝餘惑愛取二支通現及種俱能閏故有支體即行等六支爲愛取閏轉名爲有有說唯業唯識會云此能正感異熟果故有說唯五唯識復云親生當來生死位識等五故此唯種子能有果故生支體者成唯識云始從中有至本有中未衰變來皆生支攝諸衰變位總名爲老身壞命終乃名爲死此三支體皆通五蘊唯是現行異熟果攝有處亦說通種子者如緣起經能所引生一時而有次第宣說義類無別非是二支亦通種子憂悲苦惱因老死起非是支攝十地經云死別離時意根相對名憂五根相對名苦出聲啼哭名悲愚人心熱名惱在下二界具色等支無色不然隨所應有。

795a27-b17: 釋名者瑜伽有五釋一云由煩惱繫縛往諸趣中數數生起故名緣起依緣字起字釋名二依託衆緣速謝滅已續和合生故名緣起此依利那義釋名簡大衆部等十二緣起是無爲法亦簡正量部一期四相三衆緣過去而不捨離依自相續而得生起故名緣起如說此有故彼有此生故彼生非餘今依此義以釋緣起此有故彼有者顯無作緣生義此生故彼生者顯無常緣生義非餘者唯由有緣果法得有非緣有實作用能生果法亦非無生法爲因故少所生法而得成立四數數謝滅復相續起故名緣起此依數壞數減義釋五於過去世覺緣性已等相續起故名緣起如世尊說我已覺悟等起宣說即由此名展轉傳說故名緣起又云離有情義無自然我故乃至自業所作義是緣起義於餘相續不受果故又對法及緣起經各十一釋對法又云無作緣生故無常緣生故勢用緣生故初二如前無明緣行等者顯勢用緣生雖復諸法無作無常然不隨一法爲緣故一切果生諸法功能各差別故。

795b18-c10: 緣相者無明有二一眞實義愚通下中品二異熟愚唯是上品此之二愚皆緣內身異熟果起行有二種一善二不善或分爲三一不動二福三非福此爲有分熏習所攝識等五種名言熏習此五無記勢力羸劣不能自生處所未定要待有分熏習方起由下品愚發不動業由中品愚發於福業由上品愚發非福業隨發業已遂集識等五支種子攝屬於行有當生處即是當來生死種種位定無五體前後差別之相依當起位說因爲五故唯識云謂緣迷內異熟果愚發正能招後有諸業爲緣引發親生當來生死位五果種

已次依迷外増上果愚緣境界受發起貪愛緣愛復生欲等四取愛取合閏能引業種及所引因轉名爲有自從中有至本有中未衰變來生支體起衰變命終老死支現憂悲苦惱種種隨生此說由迷內身無明緣異熟受能發諸業遂集當來生老死位五支種子有當生處復由迷外境界無明緣境界受起愛及取閏前行等六支種子近有後果轉立有名自後五支現行遂起名生老死是名緣起爲緣之相**瑜伽**復有三釋相生次第如**瑜伽**說。

795c10-17: 依世者**成唯識**云十因二果定不同世要生後報方名爲支現報非故謂過去十支因現在二支果現在十支因未來二支果因中前七與愛取有或異或同生報定同後報便異謂過去七現在三未來二故若二三七各定同世者生老死二支愛取有三及前七支各定同世勢相生故力相似故。

795c17-796a14: 諸緣生攝者**攝論第二**云若略說緣起有其二種一分別自性緣起謂依阿頼耶識諸法生起二分別愛非愛緣起謂十二緣起於善惡趣能分別愛非愛自體爲緣性故今此正說後一緣起義亦攝前不正明之復說三種此二之中加受用緣生**辨中邊**云一則名緣識第二名受者此中能受用分別推心所受用緣生即六轉識亦此義攝非正辨之**瑜伽**復說四種緣生一能引謂無明行二所謂識等五三生謂愛取有四所生謂生老死**集論**說識亦是能引識中業種名識支故異熟識種名色攝故緣起經說識支通能所引業種識種俱名識故識是名色依非名色攝故**俱舍第九**復說四種一者剎那二者連縛三者分位四者遠續云何剎那謂剎那頃由貪行殺具十二支癡謂無明思即是行於諸境事了別名識識俱三蘊總稱名色住名色根說爲六處六處對餘和合有觸領觸名受貪即是愛與此相應諸纏名取所起身語二業名有如是諸法起即名生熟變名老滅壞名死今者大乘八識俱起煩惱齊生與彼不同理應思准復有說者剎那連縛如品類足俱遍有爲非同前義十二支位所有五蘊皆分位攝即此懸遠相續無始說名遠續大乘業同未來通理。

796a14-b13: 染淨順逆者**對法第四**云雜染順逆故清淨順逆故雜染順逆者或依流轉次第說謂無明緣行乃至生緣老死順次第說此說生死次第相生或依安立諦說謂老死老死集老死滅老死趣滅行如是乃至行行集行滅行趣滅行作四十四智無明無因故非四十八智種闕故此爲後觀於前加行亦作七十七智謂緣現在生而有老死非不緣現在生而有老死現在自身自己作故便成二智緣過去生緣未來生亦各二智合成六觀無始來一切老死皆緣於生未來雖未起容有雜染還滅義故今觀雜染故成二智此三際中初智觀果有因顯其所由第二智觀果有因非不決定破外妄計無因等生第七即觀前所不攝諸有漏慧遍知義故即法住智遍知三世緣起教法名支不攝以爲第七前六眞實智此一法住智合成七智異生聖者俱有此智今是見道已前凡位觀行此後方入四十四智四十四智近四諦故住教法是聞慧故名法住智如實義而知是思修慧名眞實智此有漏觀故名雜染文唯有順而無逆也清淨順逆者謂無明滅故行滅乃至生滅故老死滅順次第說此依斷位次第而說由誰無故老死無由誰滅故老死滅乃至由誰無故行無由誰滅故行滅此依得果究竟位觀逆次第說文唯有順而無逆觀廣如幽贊下卷恐繁故止雖

無現前成獨覺者令證聲聞亦說此緣依之說諦亦成三周十二行相。

- (111) [50] Skt. 179.14-180.1; Tib. 179.13-17; Chin. 25a12-15.
- (112) 796b14-21: 【72】經佛於天人至具八解脫（25a12-15）贊曰第四顯生獲益有二初明獲益後明衆多初中復二初明初會後明第二第三第四會事此初也受者著也不貪著一切法故得心解脫心解脫者由無明等煩惱解脫故成慧解脫相應之心不復緣境起於煩惱名心解脫或禪定名心能住心故得俱解脫名心解脫。
- (113) [51] Skt. 180.1-5; Tib. 180.1-3; Chin. 25a15-17.
- (114) 796b22-24: 【73】經第二至得解脫（25a15-17）贊曰此明第二第三第四會也彌勒三會說釋迦不說會利益生機各不同故。
- (115) [52] Skt. 180.5-6; Tib. 180.3-4; Chin. 25a17-18.
- (116) 796b25-26: 【74】經從是已後至不可稱數（25a17-18）贊曰此明衆多上明聲聞法輪故無菩薩。
- (117) [53] Skt. 180.7-9; Tib. 180.5-7; Chin. 25a18-21.
- (118) 796b27-c7: 【75】經爾時十六王子至三菩提（25a18-21）贊曰下第三大段子繼傳燈有五初出家啓請二爾時彼佛受沙彌請下許可正說三說此經已即入靜室下諸子傳燈四大通智勝佛過八萬四千劫下佛起讚歎五佛告諸比丘是十六菩薩下所化常益初文有二初諸子出家啓請後臣佐隨從出家初中復三初明子德次明啓請後明請意此初也有六德一已超羈網出家爲沙彌二聞法速悟諸根通利三性情鑒達智慧明了四久遇良緣會供養佛五堅持勝戒淨修梵行六志希大果求正等覺。
- (119) [54] Skt. 180.9-16; Tib. 180.7-13; Chin. 25a21-25.
- (120) 796c8-13: 【76】經俱白佛言至佛自證知（25a21-25）贊曰初明啓請昔說小乘法輪利益聲聞乘訖我意求大請說大乘法輪後明請意我等志願大乘正法如來之知見佛自證悉佛自證明願爲我說問何故前請王子在前今爲說法王子居後答前據親疎後明權實。
- (121) [55] Skt. 181.1-3; Tib. 181.1-2; Chin. 25a25-27.
- (122) 796c14-15: 【77】經爾時轉輪聖王至王即聽許（25a25-27）贊曰此明臣佐隨從出家初請後許。
- (123) [56] Skt. 181.4-7; Tib. 181.3-6; Chin. 25a27-29.
- (124) 796c16-25: 【78】經爾時彼佛至佛所護念（25a27-29）贊曰下第二段許可正說有五此中有二初將說法時待機熟故過二萬劫二陳所說法妙法蓮華妙法蓮華正爲聲聞無量義經正爲菩薩何故此中爲諸菩薩說於法華如前日月燈明因妙光法師二十億菩薩樂欲聞法中釋問何故轉二乘法輪名爲三轉十二行相大乘不爾答理應如是但以聲聞者一坐可有成見及脩無學道義菩薩不爾由是不同此說十二緣亦依四諦故。
- (125) [57] Skt. 181.8-9; Tib. 181.7-8; Chin. 25a29-b1.
- (126) 796c26-27: 【79】經說是經已至諷誦通利（25a29-b1）贊曰第三沙彌領悟。

- (127) [58] Skt. 181.10-14; Tib. 181.9-13; Chin. 25b1-4.
- (128) 796c28-797a3: 【80】 經說是經時至未曾休廢（25b1-4） 贊曰此中有二第四三根領悟第五說法時節上根菩薩聞之信受中根聲聞亦有信解下根餘類皆生疑惑是法華經難信解故下根衆生機未熟故爲今時漸故說彼時有疑惑者。
- (129) [59] Skt. 182.1-4; Tib. 182.1-4; Chin. 25b4-5.
- (130) 797a4-7: 【81】 經說此經已至四千劫（25b4-5） 贊曰下第三段諸子傳燈有三一佛入寂定二諸子說法三所度多少此初也知子根熟令子傳燈放入寂定。
- (131) [60] Skt. 182.5-8; Tib. 182.5-6; Chin. 25b5-8.
- (132) 797a8-9: 【82】 經是時十六菩薩至妙法華經（25b5-8） 贊曰諸子請法利益既衆說法時長。
- (133) [61] Skt. 182.8-11; Tib. 182.7-9; Chin. 25b8-10.
- (134) 797a10-19: 【83】 經一一皆度至三菩提心（25b8-10） 贊曰所度多少示教利喜即新翻經云示現教導讚勸慶喜顯揚第十二更加令離欲謂訶毀諸行令離愛染名令離欲示現四種真實道理名爲示現已得信解令正受行名爲教導若彼退屈策發令進名爲讚勸彼隨法行讚令忻悅名爲慶喜彼更有釋恐繁且止今此說四除初離欲此與示現俱令脩行信解別故譯家疎脫義必應然五漸化法故義准定然。
- (135) [62] Skt. 182.8-11; Tib. 182.10-184.6; Chin. 25b10-15.
- (136) 797a20-23: 【84】 經大通智勝佛至令入其中（25b10-15） 贊曰下第四段佛起讚歎有二初昇座讚歎後勸人親信此初也讚歎有七一希有二根利三智明四近聖五脩行六受持佛智七開示衆生。
- ただし、チベット語訳は以下の解説（Chin. 15b15-18, 18-21, 22-23）の翻訳を欠く。
- 797a24-25: 【85】 經汝等皆當至如來之慧（25b15-18） 贊曰此勸人親信初標勸親近後釋令信受。
- 797a26-29: 【86】 經佛告諸比丘至悉皆信解（25b18-21） 贊曰下第五段所化常益有三此中有二初常說法華二所化常益常益有二一與菩薩俱二聞法信解。
- 797a30-b3: 【87】 經以此因緣至於今不盡（25b22-23） 贊曰第三釋成常義顯今法華會上皆是彼時常益衆生衆生世世常爲友益益猶未盡生下結會之由漸也。
- (137) [63] Skt. 184.6-9; Tib. 184.6-10; Chin. 25b23-26, 26-28.
- ただし、漢文では2つ（【88】 【89】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。
- (138) 797b4-6: 【88】 經諸比丘至以爲眷屬（25b23-26） 贊曰下第四大段會成今佛有二初標成佛現利群生後顯異名成佛處所此初也。
- 797b7-12: 【89】 經其二沙彌至二名師子相（25b26-28） 贊曰此顯異名成佛處所阿闍者無動義故相用煩惱等一切不動故闍音初六反若齊作現直貌作羸廉謹狀作靨

- 不知闕字所出須彌頂極尊高故師子音示無畏故師子相示降魔怨故。
- (139) [64] Skt. 184.9-185.4; Tib. 184.10-185.5; Chin. 25b28-c1, 1-3, 3-6.
ただし、漢文では3つ（【90】【91】【92】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。
- (140) 797b13-15: 【90】 經南方二佛至二名梵相（25b28-c1） 贊曰常證法性名虛空住恒寂生死名為常滅得大自在名帝相能生群聖名梵相。
797b16-19: 【91】 經西方二佛至二名須彌相（25c1-3） 贊曰阿彌陀云無量壽慧命長故度世苦惱常起悲故多摩羅跋栴檀香云性無垢賢香衆德莊嚴名須彌相。
797b20-26: 【92】 經北方二佛至三菩提（25c3-6） 贊曰能施法雨名雲自在極廣覆蔭名雲自在王能破生死名懷怖畏能寂三業生死熹煩證寂默理名釋迦牟尼此云能寂故娑婆世界此云堪忍此土衆生不孝父母不敬沙門行十惡業道日夜增長三塗八難無量辛楚菩薩於中堪忍苦惱而行利益名為堪忍。
- (141) [65] Skt. 185.5-10; Tib. 185.6-10; Chin. 25c7-10, 10-12.
ただし、漢文では2つ（【93】【94】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。
- (142) 797b27-c4: 【93】 經諸比丘至三菩提（25c7-10） 贊曰上會佛事下會弟子事有二初正會弟子事後我滅度後復有下釋疑難初文復二初明昔化後爾時所化下正結會之初文復二初明昔化後是諸人等下明住小所以此初也本化大乘於今有住聲聞地者然於法華會前常為說般若等經方便密化大乘然彼不知我之所化事。
797c5-8: 【94】 經是諸人等至難信難解（25c10-12） 贊曰此明住小所以是人退性不定姓攝宜以權化令漸入道以佛智慧難信難解故非卒能學故我化之初權後實。
- (143) [66] Skt. 185.10-186.2; Tib. 186.1-3; Chin. 25c12-14.
- (144) 797c9: 【95】 經爾時所化至弟子是也（25c12-14） 贊曰正結會之。
- (145) [67] Skt. 186.3-5; Tib. 186.4-6; Chin. 25c14-16.
- (146) 797c10-18: 【96】 經我滅度後至當入涅槃（25c14-16） 贊曰下釋疑難謂有難言若諸聲聞皆當作佛其遇佛者蒙佛教化可當住佛佛滅度後有求聲聞不聞是經不覺不知菩薩之行廣大弘遠於自所證有為無為二功德中作有餘涅槃滅度想求當入無餘涅槃是人云何當得作佛故下釋之文有其三初牒所疑之人次釋彼亦作佛後解所由此牒所疑聲聞也。
- (147) [68] Skt. 186.5-6; Tib. 186.6-7; Chin. 25c16-18.
- (148) 797c19-798a4: 【97】 經我於餘國至得聞是經（25c16-18） 贊曰此釋彼亦作佛我於餘國作佛更有異名者菩薩處胎經說從此滅度於十方各三十二姓諸佛國土而復成佛教化衆生下醫師喻中具顯是義是人雖生滅度之想求入無餘涅槃於我有緣我以神通接引於彼遇我得聞是經或是凡夫若是有學求有無餘涅槃將此涅槃謂實滅度之想求入證此二種涅槃脩二乘行種姓所排慈悲所引生彼遇我求佛智慧或我從此餘國

作佛是人於我生滅度想謂我入無餘我引至彼令求佛智此說於我有遇緣者或雖於我無此因緣亦蒙他佛及菩薩等接引教化聞是經典當得作佛亦有潛化成就此人說法化導令向大乘今說顯化於我有緣故說於彼求佛智慧或雖於餘佛有緣往彼平等意趣故亦說是我。

(149) [69] Skt. 186.6-8; Tib. 186.7-9; Chin. 25c18-20.

(150) 798a5-11: 【98】 經唯以佛乘至方便說法（25c18-20） 贊曰此解所由由一佛乘究竟滅度無異二乘究竟體故方便說教可有三乘或唯一極果體方便說有三因因言長理其涅槃經高貴德王品云何涅槃云何大涅槃聲聞緣覺八萬劫六萬劫四萬劫二萬劫一萬劫所住名爲涅槃無上法王聖主住處名大涅槃

ただし、チベット語訳は以下の諸経などによる解釈の翻訳を欠く。

798a11-c5: 古人解云二乘諸果經爾所時入彼無餘涅槃後起迴心便引楞伽菩薩佛等化作文經爾所時耽三昧酒醉然從彼起迴向大乘今解不然彼二乘位經爾所時脩行向大者彼於先時未迴心前所應證得有餘涅槃者名爲涅槃法王所得名大涅槃非二乘者諸有學位已經八萬劫乃至四萬已入涅槃亦非無學入無餘依身智並無入涅槃已便起身智經二萬劫等脩行大行信解品云我等長夜脩習空法乃至住最後身有餘涅槃則爲已得報佛之恩莊嚴論云餘人善根涅槃時盡菩薩不爾其二乘者入無餘涅槃善根若盡同莊嚴論云何經一萬劫等脩行始入十信後經三無數劫方得菩提本識既無無識持種其身都盡將何脩行誰得菩提入無餘已若有善根非但違教亦違正理身智既在云何名爲無餘涅槃不同如來無漏依在名有餘依有漏依盡名無餘依勝鬘亦言二乘得涅槃者是佛方便成唯識云不得無住故名方便或住有餘迴心向大不得無餘名得方便涅槃經病行品云須陀洹人天七返斷結入於涅槃是人未來過八萬劫當得成阿耨菩提斯陀含人一往來斷結入於涅槃未來過六萬劫得阿耨菩提阿那含人不還未來過四萬劫當得菩提阿羅漢人過二萬劫當得菩提辟支佛人過十千劫當得菩提彼經又云過八萬劫當得阿耨多羅三藐三菩提心非成正覺名得菩提古師解云阿羅漢曾經七生者以須陀洹名說曾經二生者以斯陀含名說曾經上界生者以阿那含名說不經生而藉教者以阿羅漢名說不經生而得獨覺以辟支佛名說此前三人凡身得果聖身涅槃後之二人凡身得果凡身涅槃還多生者鈍所以經寂時多經生少者利所以還寂時小所經八萬劫引菩提留支解仍以悲想八萬劫爲一日夜積此歲數成大劫彼壽無量大劫過此已後方始發心驗之釋之未爲典據經釋須陀洹者七生斷結得入涅槃是須陀洹經八萬劫始得大菩提心十信初位誰言八萬劫住於涅槃此阿羅漢名須陀洹經八萬劫始得發心甚成可嘆又若入無餘身依永盡云何無因而後起耶不爾無餘說是何義若如佛入無餘涅槃有漏永盡更得無漏無漏既圓何不名佛若斷縛盡名入無餘身智不亡無餘何在有依身故無餘有餘二種何別種種推徵義難符信然涅槃經須陀洹人八萬劫等義如前說實是彼果非阿羅漢以彼名說亦非阿羅漢有經生者若彼經意但總說阿羅漢人實有學人發心向大復經幾時應涅槃經無有學中而迴心者由此應以涅槃等經同瑜伽等最爲善說。

- (151) 798c6: 法華經玄贊卷第七末。
798c12-14: 妙法蓮華經玄贊卷第八本 沙門基據。
『大正藏』では、この間に日本の写本の奥書が挿入されている。
- (152) [70] Skt. 186.8-10; Tib. 186.9-11; Chin. 25c20-21.
- (153) 798c15-29: 【99】 經諸比丘至深入禪定（25c20-21） 贊曰上說宿因令念退大以就小下顯今果令捨權以取實文分爲三初法次喻後合說故初文有二初明今實後釋先權所由比丘當知下是初文又二初知機熟後說一乘此初也機熟有五一涅槃時到衆生機熟恐佛涅槃聞即深信二衆又清淨煩惱輕微漸離染故初說三乘出於濁世衆生垢重今久化之漸令離垢故名清淨三信解堅固證解證信二皆堅固非可阻壞四了達空法空法有二一生空二法空空爲所證法空爲所知已證生空後聞般若知法空故五深入禪定四禪九定能入出故此依退已還發大心聲聞等說要此五具足方會二權而歸一實異則不然。
- (154) [71] Skt. 186.10-187.1; Tib. 186.11-13; Chin. 25c21-23.
ただし、『解深密經』の引用の翻訳はあるものの、『勝鬘經』の引用と『涅槃經』の言及の翻訳を欠く。
- (155) 798c30-799a18: 【100】 經便集諸菩薩至得減度耳（25c21-23） 贊曰此說一乘乘既說四而爲了義說一而爲方便解深密云相生勝義無自性如是我皆已顯示若不知佛此密意失壞正道不能往故於其中立一乘非有情性無差別勝鬘亦云攝受正法善男子等堪能荷負四種重任逾彼大地謂無聞非法衆生以人天善根而成熟之即是此說三中小草求聲聞者授聲聞乘求緣覺者授緣覺乘合是中草求大乘者授以大乘即是大草又云若如來隨彼意欲而方便說唯一乘無有餘乘故知據理說一爲權說四爲實解深密云非有情性無差別故今此經中爲化退已還發大心故說一實而二是權待根機熟五緣具足方說無有二乘而得減度唯一佛乘得減度耳涅槃經中說諸聲聞皆得作佛皆不作佛世尊並言不解我意故能如是了知經意亦應善順佛菩薩心然今此會多皆退性故說一實而二爲權。
- (156) [72] Skt. 187.1-3; Tib. 187.1-2; Chin. 25c23-26.
- (157) 799a19-24: 【101】 經比丘當知至則便信受（25c23-26） 贊曰此釋先權所由以方便智證入衆生根性勝解由意樂小本著五欲我且拔除生死苦故授以小法令離五欲五欲即是緣五境貪故先說涅槃設化城以息苦既得涅槃已是人若聞今說一乘引至寶所即便信受。
- (158) [73] Skt. 187.4-6; Tib. 187.3-4; Chin. 25c26-28.
ただし『正法華經』の言及の翻訳を欠く。
- (159) 799a25-b18: 【102】 經譬如五百至至珍寶處（25c26-28） 贊曰下喻說中有二初喻昔權後喻今實爾時導師知此人衆下是初文有四第一初將離險喻第二所將人衆下中途方退喻第三導師多諸方便下爲設化城喻第四是時疲極之衆下衆倦皆息喻前信解

品喩昔權有六今此即彼然無初二以初退時猶未向小未設化城所以今略唯同後四或此第一初將離險即攝彼第一第三此中第二即攝彼第二第四此後二喩即攝彼後二開合有殊義亦無別初喩有四一欲過惡處二將往寶方三商主誥途四方行引導此初二也五百由旬者**正法華**云五道生死名險難惡道曠空也疎也久也遠也絕者過也生死之中本無聖智者如空疎久遠絕過無人甚可驚懼五怖畏等名怖畏處今又解者**正法華**中出險道體非釋彼數言五百者分段生死有惑業苦爲三百變易生死有無明苦爲二百十煩惱十業道所感十品類果皆互相資故合言五百下言過三百由旬設化城故若以五道數卽爲五過三惡道始入見諦未見化城云何稱入故應依後釋珍寶處者大般涅槃佛果位也喩越生死險方至佛位故。

(160) [75] Skt. 187.6-7; Tib. 187.4-5; Chin. 25c28-29.

(161) 799b19-25: 【103】 經有一導師至欲過此難（25c28-29） 贊曰此中有二商主誥途四方行引導也導師謂佛此具五德一聰性利根故二慧擇是非故三明鑒眞俗故四達無不知故五善知險道通塞之相道謂諸趣通謂斷五住塞謂起二障惑業有而爲塞苦因盡而爲通方行引導文意可知。

(162) [76] Skt. 187.7-8; Tib. 187.6-7; Chin. 25c29-26a2.

(163) 799b26-c3: 【104】 經所將人衆至今欲退還（25c29-26a2） 贊曰此第二中途方退喩修大乘因未過六十劫倦修菩薩行名中路疲憊大行難修艱辛備歷名爲疲極以倦時長名爲疲極懼聖行海怯有進修復名怖畏由怖行大名爲怖畏不能進求大菩提果經三大劫前路猶遠退大不學還住生死名今退還此乃義說非實二乘昔時白佛方退住小。

(164) [77] Skt. 187.8-188.1; Tib. 187.7-188.1; Chin. 26a2-5.

(165) 799c4-26: 【105】 經導師多諸方便至化作一城（26a2-5） 贊曰此下第三爲設化城喩有四一假思念二設化城三勸住勿怖四說入城益此初二也**攝大乘**云如末尼天鼓無思成自事雖無勉勵思亦有任運思雖無實思假稱思故諸佛常六返晝夜觀衆生義如思故過三百由旬者若言五趣爲五百者此過分段生死出三界故或令永出三惡趣爲三百如五下分結身見等三後時說故實初已斷分段雖亦出於人天變易猶爲人天趣攝不名爲出若依正說分段生死有惑業苦離此三故名過三百由旬涅槃在於無學位故作化一城者**本論**云諸禪三昧城過彼城已令入大涅槃城故佛言施設本無實體故言化作彼證滅心相應禪定俱輕安樂能息龜重佛教之得名爲化作滅理無二對種智事故名爲一又雖是假人各有殊以假義同故名爲一又以機學二乘證殊故下偈云息處故說二以假對眞眞既不二假寧不一此喩有餘涅槃惑業斷故當苦不生實得無餘餘身智在未與證名後身智亡方名爲證如想受滅無爲據終滿處說。

(166) [77] Skt. 188.1-4; Tib. 188.1-4; Chin. 26a5-8.

(167) 799c27-800a1: 【106】 經告衆人言至亦可得去（26a5-8） 贊曰此中有二勸住勿怖說入城益若入是城下是不須怖大而不肯修且入此城隨意所作任力所修息眞顯意密設權方入益有二一得安穩樂而息衆苦二向佛位後漸可修。

- (168) [78] Skt. 188.5-7; Tib. 188.5-8; Chin. 26a8-10.
ただし『勝鬘經』の引用に対する翻訳を欠く。
- (169) 中村瑞隆『現代語：訳法華經；上』春秋社, 1995, p. 272, 注44参照。
- (170) 800a2-18: 【107】 經是時疲極之衆至生安隱想（26a8-10） 贊曰此第四衆倦皆息喩有二初在有學稱心歡喜言歎心歡規免險道後成無學解脫道位前入化城得有餘滅生已度想越生死故離苦集故變易生死實未離故言生已度想生安隱想得無學故證滅道故未得大涅槃真安隱故言生安隱想遂生四智我生已盡梵行已立所作已辦不受後有勝鬘云阿羅漢不成就一切無量等功德故言得涅槃又言四智究竟得蘇息處者是佛方便有餘不了義說故此化城是佛權設正起生空智證生空理後惑不生名爲入城當此之時無此二想後入世俗定却觀前位遂生此想涅槃假滅二乘證故言前入於化城二車種智本來無二子出宅車不上車是不繫出宅而索城於路施故言前入此等妨難皆如前說。
- (171) [79] Skt. 188.8-10; Tib. 188.9-10; Chin. 26a10-13.
- (172) 800a19-26: 【108】 經爾時導師至爲止息耳（26a10-13） 贊曰下第二段喩今說實有二初標滅化後正告真滅化者引至大乘說二乘涅槃是假擇滅故言滅化非是實以神力滅彼化城此中語言向者大城我所化作指說化城即是滅故去實處近者即告真也雖復無學迂迴修大因行遲於頓悟望有學迴心乃極疾故言在近。
- (173) [80] Skt. 188.11-189.1; Tib. 188.11-13; Chin. 26a13-15.
- (174) 800a27-b3: 【109】 經諸比丘至應去應度（26a13-15） 贊曰下合說中有二初合昔權後若衆生住於二地下方合今實初文有三初合初將離險次若衆生但聞下合中途方退後佛知是心下合爲說化城不合第四衆倦皆息欲明權實二道不欲正明苦息事故此初也去者向涅槃度者越生死。
- (175) [81] Skt. 189.1-2; Tib. 189.1-2; Chin. 26a15-17.
- (176) 800b4-7: 【110】 經若衆生至乃可得成（26a15-17） 贊曰此合中途方退若但讚佛乘衆生不能以是得度久受勤苦故遂便退失佛道長遠倦時長故久受勤苦怖行大故。
- (177) [82] Skt. 189.2-6; Tib. 189.2-5; Chin. 26a17-19.
- (178) 800b8-13: 【111】 經佛知是心至說二涅槃（26a17-19） 贊曰此合爲說化城怯弱大乘下劣樂小故於中道說二涅槃二機所學二智所證名二涅槃二涅槃體但是有餘非說有餘無餘爲二前言一城以假對真化是一故以理對事理無異故今對根機修因證智名二涅槃亦不相違。
- (179) [83] Skt. 189.6-11; Tib. 189.6-10; Chin. 26a19-22, 23-24.
ただし、漢文では2つ（【112】【113】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。
- (180) 800b14-27: 【112】 經若衆生至分別說三（26a19-22） 贊曰下合今實有二初法說滅化告真後合說滅化告真此初二初說彼非真後說二乘意汝等所作未辦者勝鬘云

阿羅漢辟支佛有餘生法不盡故有生有餘梵行不成故不純事不究竟故當有所作不度彼故當有所斷以不斷故去涅槃界遠所作未辦即當有所作道聖諦也猶有法空道諦之智當所作故舉此攝餘亦應所學汝之梵行已立滅諦之智證有餘涅槃之地近於佛慧所得非真有餘梵行不成故不純謂所知障未滅無住涅槃猶未得故當觀察籌量苦集二智亦復非真故所得涅槃非真實也況初說二乘意云但是如來方便之力。

800b28-29: 【113】 經如彼導師至我化作耳（26a23-24） 贊曰此合說滅化告真。

(181) [84] Skt. 189.12-190.5; Tib. 189.11-190.5; Chin. 26a25-b2.

(182) 800b30-c14: 【114】 經爾時世尊至更雨新好者（26a25-b2） 贊曰下四十九頌半分二初三十頌半頌前初說宿因令念退大以就小大通智勝如來事十九頌顯頌今果令知捨權以取實化城喻事初文復二初二十八頌半頌昔因緣後之二頌結誠勿怖初復分二初二十七頌半頌會自身事後一頌頌會弟子事初文長行有二初說佛滅久近後正明彼事今唯頌後初已頌訖彼事長行有四今此亦然初四頌明佛壽成道第二次十三頌轉正法輪第三次九頌半子繼傳燈第四後有一頌會成今佛初中有二初三頌法不現前後一頌明佛成道不頌佛壽初中復二初一頌法不現前後二頌華樂供養此即二文不頌數座長行唯有梵天雨華此加八部。

(183) [85] Skt. 190.6-14; Tib. 190.6-14; Chin. 26b3-4, 5-10.

ただし、漢文では2つ（【115】 【116】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。

(184) 800c15-16: 【115】 經過十小劫已至心皆懷踊躍（26b3-4） 贊曰明佛成道。

800c17-20: 【116】 經彼佛十六子至震動於一切（26b5-10） 贊曰下第二段十三頌轉正法輪有二初八頌請後五頌正轉請中有二初三頌十六子請無供養也後五頌諸梵王請此初也。

(185) [86] Skt. 190.15-192.2; Tib. 190.15-192.2; Chin. 26b11-16, 17-20, 21-24.

ただし、漢文では3つ（【117】 【118】 【119】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。

(186) 800c21-23: 【117】 經東方諸世界至受請默然坐（26b11-16） 贊曰下五頌梵王請初三頌東方後二餘方此初也文亦有四准前可知。

800c24-25: 【118】 經三方及四維至轉無上法輪（26b17-20） 贊曰餘方請也。

800c26-801a7: 【119】 經無量慧世尊至汝等應當知（26b21-24） 贊曰下五頌正轉有二初二頌許可正說後三頌衆生獲益此初也無明至老死皆從生緣有者此釋長行無明緣行行緣識乃至生緣老死義此言生者不是生支是能生此言有者不是有支是有無有謂如行支從無明支能生緣故方有其識支體從前行支能生緣故有乃至老死從前生支能生之緣故有不是無因不平等因之所生起皆從緣生故即顯無明從老死能生之緣故有輪轉無窮故名緣起。

(187) [87] Skt. 192.3-8; Tib. 192.3-8; Chin. 26b25-c1.

- (188) 801a8-13: 【120】 經宣暢是法時至不能得其邊（26b25-c1） 贊曰衆生獲益也初頌第一會次頌第二會後頌第三第四會炫音古哀反數也風俗通十千曰萬十萬曰億十億曰兆十兆曰京十京曰姦猶大數也即前長行六百萬億那由他那由他姦也。
- (189) [88] Skt. 192.9-193.2; Tib. 192.9-193.2; Chin. 26c2-5.
- (190) 801a14-18: 【121】 經時十六王子至慧眼第一淨（26c2-5） 贊曰下第三段子繼傳燈長行有五此中有四初二頌出家啓請次二頌半佛許正說次有四頌諸子傳燈後有一頌所化常益此初也唯無第四佛起讚歎營衛翊從即臣佐也。
- (191) [89] Skt. 193.3-195.6; Tib. 193.3-195.6; Chin. 26c6-10, 11-18, 19-20, 21-22, 23-24, 25-28.
ただし、漢文では6つ（【122】～【127】）に分けられたものが、チベット語訳では1つにまとめられている。
- (192) 801a19-20: 【122】 經佛知童子心至如恒河沙偈（26c6-10） 贊曰第二佛許正說。
801a21-23: 【123】 經彼佛說經已至恒河沙等衆（26c11-18） 贊曰第三諸子傳燈有三初一頌佛入寂定次二頌諸子傳燈後一頌所度多少。
801a24-25: 【124】 經彼佛滅度後至常與師俱生（26c19-20） 贊曰第四所化常益。
801a26-28: 【125】 經是十六沙彌至各得成正覺（26c21-22） 贊曰第四大段會成今佛上來四段二十七頌半合是第一會自身事。
801a29-b2: 【126】 經爾時問法者至漸教以佛道（26c23-24） 贊曰此第二大段一頌會弟子事合二十八頌半頌昔因緣退大就小。
801b3-5: 【127】 經我在十六數至愼勿懷驚懼（26c25-28） 贊曰第二大段結成今說誠勿驚怖上合三十頌半說宿因緣令念退大以就小大通佛事。
- (193) [90] Skt. 195.7-8; Tib. 195.7-8; Chin. 26c29-27a5.
- (194) 801b6-16: 【128】 經譬如險惡道至在險濟衆難（26c29-27a5） 贊曰下第二大段有十九頌頌顯今果令知捨權以取實化城喻事分二初十一頌半頌喻說後七頌半頌合說不頌法說初文復二初九頌頌昔說權喻後二頌半頌今說實喻初文有四初三頌初將離險喻次一頌中途方退喻次四頌爲設化城喻後一頌衆倦皆息喻此初有三初一頌道險多難次一頌欲過路遙後一頌導師濟難多毒獸者煩惱惡業果也無水者無佛法教無草者無佛理義佛大導師在生死險濟衆人難。
- (195) [91] Skt. 195.9-196.4; Tib. 195.9-196.4; Chin. 27a6-7.
- (196) 801b17-18: 【129】 經衆人皆疲倦至於此欲退還（27a6-7） 贊曰第二中途方退喻。
- (197) [92] Skt. 196.5-6; Tib. 196.5-6; Chin. 27a8-9.
- (198) 801b19-21: 【130】 經導師作是念至而失大珍寶（27a8-9） 贊曰下第三有四頌爲設化城喻分三初一頌起念次二頌化作後一頌勸入此初也。
- (199) [93] Skt. 196.7-10; Tib. 196.7-10; Chin. 27a10-13.
- (200) 801b22-29: 【131】 經尋時思方便至男女皆充滿（27a10-13） 贊曰第二化作也城

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喻品」和訳（望月）

郭者有餘涅槃城即是郭其中衆生畢竟空爲舍宅無垢稱云思空勝義舍覺品華莊嚴總持爲園苑大法爲林樹九定爲渠流八解爲浴池三解脫門爲重門重門即高樓閣高逾外道生死表故入空舍故眞實諦法爲男生空眞智是慈悲心爲女撫養群生故依無垢稱經以釋此義。

- (201) [94] Skt. 197.1-2; Tib. 197.1-2; Chin. 27a14-15.
 (202) 801c1-2: 【132】 經卽作是化已至各可隨所樂 (27a14-15) 贊曰第三勸入也。
 (203) [95] Skt. 197.3-4; Tib. 197.3-4; Chin. 27a16-17.
 (204) 801c3-4: 【133】 經諸人既入城至自謂已得度 (27a16-17) 贊曰第四衆倦皆息喻。
 (205) [96] Skt. 197.5-8; Tib. 197.5-8; Chin. 27a18-22.
 (206) 801c5-7: 【134】 經導師知息已至當共至寶所 (27a18-22) 贊曰此第二段頌今說實喻初一頌標減化後一頌半正告眞。
 (207) [97] Skt. 197.9-12; Tib. 197.9-12; Chin. 27a23-27.
 (208) 801c8-12: 【135】 經我亦復如是至所作皆已辦 (27a23-27) 贊曰下第二大段有七頌半合說中分二初二頌半頌合昔權後有五頌頌合今說實此初也初半頌初將離險次一頌中途方退後一頌爲設化城。
 (209) [98] Skt. 198.1-2; Tib. 198.1-2; Chin. 27a28-29.
 (210) 801c13-15: 【136】 經既知到涅槃至爲說眞實法 (27a28-29) 贊曰下有五頌頌合今說實有三初一頌標今說實次三頌勸捨權就實後一頌結之此初也。
 (211) [99] Skt. 198.3-8; Tib. 198.3-8; Chin. 27b1-6.
 (212) 801c16-18: 【137】 經諸佛方便力至乃是眞實滅 (27b1-6) 贊曰此勸捨權以就實初一頌半勸捨權後一頌半勸取實。
 (213) [100] Skt. 198.9-10; Tib. 198.9-10; Chin. 27b7-8.
 (214) 801c19-20: 【138】 經諸佛之導師至引入於佛慧 (27b7-8) 贊曰此結成前。

〔付録〕 漢文テキスト「化城喻品」の科文

頁：【經】	科文	名目（偈頌数）	引用・言及*（列挙順）
789b16	0	三門分別	
789b16	0-1	來意	
789b17	0-1-1	上中根類…故此品來	
789b21	0-1-2	論解為対治七種…護法等解	『法華論』(2)「護法義*」「安慧師*」「法華論*」「有釈言」「護法等解*」
790a5	0-1-3	十無上中…故此品來	『法華論*』
790a14	0-1-4	十無上中…非文殘也	『法華論*』
790a18	0-2	釈名	
790a22	0-3	解妨（問答）	『正法華*』

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

790b5: 【1】	III-1	第三周第二段 (仏以喩正化)	
	1	説宿因令念退大以就小	『法華論*』(2)
	1-1	説過去因縁結会仏自身事	
	1-1-1	明大通仏去今久近	
	1-1-1-1	長行	
	1-1-1-1-1	明彼仏久近	
	1-1-1-1-1-1	総告	
790b28: 【2】	1-1-1-1-1-1-2	名	
	1-1-1-1-1-1-3	国	
	1-1-1-1-1-1-4	劫	
790b29: 【3】	1-1-1-1-1-2	問答	
	1-1-1-1-1-2-1	問	
	1-1-1-1-1-2-1-1	较量	
790c4: 【4】	1-1-1-1-1-2-1-2	問	
	1-1-1-1-1-2-2	答	
790c5: 【5】	1-1-1-1-1-2-3	明久近	
790c9: 【6】	1-1-1-1-2	顕已能見	
	1-1-1-1-2-1	問答(意趣有四)	
	1-1-1-1-2-1-1	平等意趣	
	1-1-1-1-2-1-2	別時意趣	
	1-1-1-1-2-1-3	別義意趣	
	1-1-1-1-2-1-4	衆生意樂意趣	
790c23: 【7】	1-1-1-2	偈頌(7)	
	1-1-1-2-1	頌久時(5)	
	1-1-1-2-1-1	告仏名(1)	
790c26: 【8】	1-1-1-2-1-2	告劫数(4)	
790c28: 【9】	1-1-1-2-2	頌能見(2)	
790c30: 【10】	1-1-2	正明彼事(初会自身事)	
	1-1-2-1	仏寿成道	
	1-1-2-1-1	明仏寿	
791a8: 【11】	1-1-2-1-2	[明]法難得	
	1-1-2-1-2-1	不現前	『大智度論カ*』『華嚴経*』『涅槃経*』
791a25: 【12】	1-1-2-1-2-2	敷坐	『勝天王般若波羅蜜経』
791b1: 【13】	1-1-2-1-2-3	散華	
791b3: 【14】	1-1-2-1-2-4	作樂	
791b6: 【15】	1-1-2-1-3	説得道	
791b7: 【16】	1-1-2-2	転正法輪	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

	1-1-2-2-1	供養請転	
	1-1-2-2-1-1	明十六子供養請転	
	1-1-2-2-1-1-1	詣仏供養	
	1-1-2-2-1-1-1-1	明詣仏	
	1-1-2-2-1-1-1-1-1	明仏子	『阿弥陀鼓音声王陀羅尼經』
791b21: 【17】	1-1-2-2-1-1-1-1-2	明往詣[/詣仏]	
791b22: 【18】	1-1-2-2-1-1-1-1-3	母送	
	1-1-2-2-1-1-1-1-4	祖送	
791b25: 【19】	1-1-2-2-1-1-1-1-5	詣意	
791b26: 【20】	1-1-2-2-1-1-1-2	明礼讚	
	1-1-2-2-1-1-1-2-1	身礼	
	1-1-2-2-1-1-1-2-2	語讚	
	1-1-2-2-1-1-1-2-A	偈頌（8）	
	1-1-2-2-1-1-1-2-A-1	讚仏願滿勝徳（1.5）	
791c1: 【21】	1-1-2-2-1-1-1-2-A-2	讚仏修因勝徳（2）	『華嚴經』
791c19: 【22】	1-1-2-2-1-1-1-2-A-3	申婦礼意（4.5）	
	1-1-2-2-1-1-1-2-A-3-1	標仏得道我等獲益（1）	
791c22: 【23】	1-1-2-2-1-1-1-2-A-3-2	釈其所由（3.5）	
	1-1-2-2-1-1-1-2-A-3-2-1	明諸衆生不近善友輪迴受苦（2）	
791c29: 【24】	1-1-2-2-1-1-1-2-A-3-2-2	遇益故婦礼（1.5）	
792a1: 【25】	1-1-2-2-1-1-2	請転法輪	
	1-1-2-2-1-1-2-1	長行	
792a4: 【26】	1-1-2-2-1-1-2-2	偈頌（4.5）	
	1-1-2-2-1-1-2-2-1	仏具内外徳故請（1）	
792a8: 【27】	1-1-2-2-1-1-2-2-2	有大利益故請（1.5）	
792a10: 【28】	1-1-2-2-1-1-2-2-3	明仏識達故請（2）	
	1-1-2-2-1-1-2-2-3-1	所念即欲樂勝解	
	1-1-2-2-1-1-2-2-3-2	所行道遍趣行	
	1-1-2-2-1-1-2-2-3-3	智慧力即根勝劣	
	1-1-2-2-1-1-2-2-3-4	宿命即宿住力	
	1-1-2-2-1-1-2-2-3-5	業即自業智力	
792a15: 【29】	1-1-2-2-1-2	明梵天王供養請転	
	1-1-2-2-1-2-1	神光動照	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

	1-1-2-2-1-2-1-1	動十方世界	
792a19: 【30】	1-1-2-2-1-2-1-2	光照幽冥	
792a21: 【31】	1-1-2-2-1-2-1-3	動照梵宮	
792a23: 【32】	1-1-2-2-1-2-2	供養請転	
	1-1-2-2-1-2-2-1	東方	
	1-1-2-2-1-2-2-1-1	觀光驚議	
	1-1-2-2-1-2-2-1-1-1	衆梵驚問	
	1-1-2-2-1-2-2-1-1-1-1	光	
	1-1-2-2-1-2-2-1-1-1-2	念	
	1-1-2-2-1-2-2-1-1-1-3	議	
792b1: 【33】	1-1-2-2-1-2-2-1-1-2	一天請求	
792b4: 【34】	1-1-2-2-1-2-2-1-2	尋光詣仏	
	1-1-2-2-1-2-2-1-2-1	持宮華以推覓	
792b7: 【35】	1-1-2-2-1-2-2-1-2-2	見仏衆以忻然	
792b9: 【36】	1-1-2-2-1-2-2-1-3	礼讚請転	
	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1	供養	
	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1-1	長行	
	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1-1-1	帰礼散華	
792b12: 【37】	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1-1-2	献宮請納[/ 請納安処]	
792b13: 【38】	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1-2	偈頌 (4)	
	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1-2-1	讚五徳 (2)	
792b16: 【39】	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1-2-2	陳来由 (1)	
	1-1-2-2-1-2-2-1-3-1-2-3	請納受 (1)	
792b18: 【40】	1-1-2-2-1-2-2-1-3-2	請転[法輪]	
792b20: 【41】	1-1-2-2-1-2-2-1-4	[仏]默然許之 (問答)	「古解」(4)
792b28: 【42】	1-1-2-2-1-2-2-2	東南方	
	1-1-2-2-1-2-2-2-1	觀光驚議	
	1-1-2-2-1-2-2-2-1-1	衆梵驚議	
792b30: 【43】	1-1-2-2-1-2-2-2-1-2	一天請求	
792c2: 【44】	1-1-2-2-1-2-2-2-2	尋光詣仏	
	1-1-2-2-1-2-2-2-2-1	持宮華以推覓	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喻品」和訳（望月）

	1-1-2-2-1-2-2-2-2	見仏衆以忻然	
792c5: 【45】	1-1-2-2-1-2-2-2-3	礼讚請転	
	1-1-2-2-1-2-2-2-3-1	供養	
	1-1-2-2-1-2-2-2-3-1-1	長行供養	
792c8: 【46】	1-1-2-2-1-2-2-2-3-1-2	讚[/ 偈頌] (4.5)	
	1-1-2-2-1-2-2-2-3-1-2-1	讚礼 (1)	
792c13: 【47】	1-1-2-2-1-2-2-2-3-1-2-2	歎希有 (1.5)	
792c15: 【48】	1-1-2-2-1-2-2-2-3-1-2-3	歎為眼目 (1)	
	1-1-2-2-1-2-2-2-3-1-2-4	歎為慈父 (1)	
792c17: 【49】	1-1-2-2-1-2-2-2-3-2	請転	
792c20: 【50】	1-1-2-2-1-2-2-2-4	[仏] 默然許之	
792c22: 【51】	1-1-2-2-1-2-2-3	南方	
	1-1-2-2-1-2-2-3-1	觀光驚議	
	1-1-2-2-1-2-2-3-1-1	衆梵驚議	
	1-1-2-2-1-2-2-3-1-2	一天請求	
792c25: 【52】	1-1-2-2-1-2-2-3-2	尋光詣仏	
	1-1-2-2-1-2-2-3-2-1	持宮華以推覓	
	1-1-2-2-1-2-2-3-2-2	見仏衆以忻然	
792c28: 【53】	1-1-2-2-1-2-2-3-3	礼讚請転	
	1-1-2-2-1-2-2-3-3-1	供養	
	1-1-2-2-1-2-2-3-3-1-1	長行	
	1-1-2-2-1-2-2-3-3-1-2	偈頌 (3.5)	
	1-1-2-2-1-2-2-3-3-1-2-1	歎仏 (2.5)	
	1-1-2-2-1-2-2-3-3-1-2-2	請受 (1)	
	1-1-2-2-1-2-2-3-3-2	請転	
793a1: 【54】	1-1-2-2-1-2-2-3-3-2-1	長行	
	1-1-2-2-1-2-2-3-3-2-2	偈頌	
	1-1-2-2-1-2-2-3-4	[仏] 默然許之	
793a3: 【55】	1-1-2-2-1-2-2-4	例[余] 六方	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

793a7: 【57】	1-1-2-2-1-2-2-5	上方	
	1-1-2-2-1-2-2-5-1	觀光驚議	
	1-1-2-2-1-2-2-5-1-1	衆梵驚議	
	1-1-2-2-1-2-2-5-1-2	一天請求	
793a10: 【58】	1-1-2-2-1-2-2-5-2	尋光詣仏	
	1-1-2-2-1-2-2-5-2-1	持宮華以推覓	
	1-1-2-2-1-2-2-5-2-2	見仏衆以忻然	
793a13: 【59】	1-1-2-2-1-2-2-5-3	供養請轉	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1	供養	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-1	長行	
793a16: 【60】	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2	偈頌（10.5）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1	讚仏徳（7.5）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-1	標（2）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-1-1	歎能拔苦（1）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-1-2	歎能与楽（1）	
793a25: 【61】	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-2	釈（5.5）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-2-1	生死輪迴（4.5）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-2-1-1	受苦果（2）	
793a29: 【62】	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-2-1-2	行悪因（2.5）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-2-1-2-1	在家行悪行（1.5）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-2-1-2-2	外道行悪行（1）	
793b5: 【63】	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-1-2-2	釈仏能拔（1）	
793b7: 【64】	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-2	見仏生喜（1）	
793b9: 【65】	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-3	請納（1）	
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-1-2-4	迴向（1）	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喻品」和訳（望月）

793b11: 【66】	1-1-2-2-1-2-2-5-3-2	請転[/ 讚転] (2)		
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-2-1	讚 (1)		
	1-1-2-2-1-2-2-5-3-2-2	請 (1)		
793b13: 【67】	1-1-2-2-2	許可為転		
	1-1-2-2-2-1	標許可為転		
	1-1-2-2-2-1-1	自[三転]		
	1-1-2-2-2-1-2	他[三転]	「第四卷疏*」	
793b26: 【68】	1-1-2-2-2-2	明余所不能		
793b28: 【69】	1-1-2-2-2-3	彰所転之法[/ 彰所転[法] 輪之境]		
	1-1-2-2-2-3-1	四諦（五門分別）		
	1-1-2-2-2-3-1-1	出体		
	1-1-2-2-2-3-1-1-1	苦諦	『対法等』	
	1-1-2-2-2-3-1-1-2	集諦		
	1-1-2-2-2-3-1-1-2-1	招感異熟無記果義	『対法等*』『唯識等*』	
	1-1-2-2-2-3-1-1-2-2	為因能得有漏果義	『瑜伽等*』	
	1-1-2-2-2-3-1-1-3	滅諦	『対法論*』	
	1-1-2-2-2-3-1-1-4	道諦	『対法等*』『涅槃經』『対法*』『涅槃經*』『瑜伽*』『勝鬘經*』『新翻經*』	
	794a14:	1-1-2-2-2-3-1-2	釈名	『瑜伽師地論』五十五
	794a24:	1-1-2-2-2-3-1-3	廢立	『瑜伽師地論』九十五
	794b1:	1-1-2-2-2-3-1-4	釈妨	『瑜伽師地論』五十五
	794b16:	1-1-2-2-2-3-1-5	諸門（十門分別）	
		1-1-2-2-2-3-1-5-1	幾蘊所撰	
		1-1-2-2-2-3-1-5-2	誰各幾行	
		1-1-2-2-2-3-1-5-3	何故苦諦為四行觀	
		1-1-2-2-2-3-1-5-4	誰解脫門撰幾行	
		1-1-2-2-2-3-1-5-5	入諦現觀有幾種	
		1-1-2-2-2-3-1-5-6	三乘觀諦有何差別	
		1-1-2-2-2-3-1-5-7	此四諦為世俗為勝義	『瑜伽師地論』五十五・六十四
1-1-2-2-2-3-1-5-8		諸諦相撰		
1-1-2-2-2-3-1-5-9		苦有幾種		
1-1-2-2-2-3-1-5-10	虚空非泯滅何諦所撰	『瑜伽・対法・唯識・顯揚等*』		
794c2: 【70】	1-1-2-2-2-3-2	十二縁[起]（六門分別）		
	1-1-2-2-2-3-2-A	雜染		
	1-1-2-2-2-3-2-A-1	雜染順觀（例雜染逆觀）		
	1-1-2-2-2-3-2-A-2	雜染逆觀		

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

	1-1-2-2-3-2-B	清淨	
794c7: 【71】	1-1-2-2-3-2-B-1	清淨順觀（例清淨逆觀）	
	1-1-2-2-3-2-B-2	清淨逆觀	
794c10:	1-1-2-2-3-2-1	出体	『成唯識論』(5)『契經*』『成唯識論』(2)『瑜伽師地論*』『成唯識論』『瑜伽師地論*』『成唯識論』(2)『緣起經*』『十地經』
795a27:	1-1-2-2-3-2-2	釈名	『瑜伽師地論』『対法*』『縁起經*』『対法』
795b18:	1-1-2-2-3-2-3	縁相	『成唯識論』『瑜伽師地論*』(2)
795c10:	1-1-2-2-3-2-4	依世	『成唯識論』
795c17:	1-1-2-2-3-2-5	諸縁生摂	『撰大乘論』『弁中辺論』『瑜伽師地論』『成唯識論（集論・縁起經）』『俱舍論』(3)
796a14:	1-1-2-2-3-2-6	染淨順逆	『大乘阿毘達磨雜集論』
796b14: 【72】	1-1-2-2-4	顕生聞獲益	
	1-1-2-2-4-1	明獲益	
	1-1-2-2-4-1-1	明初会	
796b22: 【73】	1-1-2-2-4-1-2	明第二第三第四会事	
796b25: 【74】	1-1-2-2-4-2	明衆多	
796b27: 【75】	1-1-2-3	子繼伝燈	
	1-1-2-3-1	出家啓請	
	1-1-2-3-1-1	諸子出家啓請	
	1-1-2-3-1-1-1	明子徳（六徳）	
	1-1-2-3-1-1-1-1	已超羈網出家為沙弥	
	1-1-2-3-1-1-1-2	聞法速悟諸根通利	
	1-1-2-3-1-1-1-3	性情鑒達智慧明了	
	1-1-2-3-1-1-1-4	久遇良縁曾供養仏	
	1-1-2-3-1-1-1-5	堅持勝戒淨修梵行	
	1-1-2-3-1-1-1-6	志希大果求正等覺	
796c8: 【76】	1-1-2-3-1-1-2	明啓請	
	1-1-2-3-1-1-3	明請意	
	1-1-2-3-1-1-A	問答	
796c14: 【77】	1-1-2-3-1-2	臣佐随従出家	
	1-1-2-3-1-2-1	請	
	1-1-2-3-1-2-2	許	
796c16: 【78】	1-1-2-3-2	許可正説	
	1-1-2-3-2-1	将説法時待機熟故過二万劫	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

	1-1-2-3-2-2	陳所說法妙法蓮華	
	1-1-2-3-2-A	問答 1	『無量義經*』
	1-1-2-3-2-B	問答 2	
796c26: 【79】	1-1-2-3-2-3	沙弥領悟	
796c28: 【80】	1-1-2-3-2-4	三根領悟	
	1-1-2-3-2-5	說法時節	
797a4: 【81】	1-1-2-3-3	諸子伝燈	
	1-1-2-3-3-1	仏入寂定	
797a8: 【82】	1-1-2-3-3-2	諸子說法	
797a10: 【83】	1-1-2-3-3-3	所度多少	『新翻經*』『顯揚論*』
797a20: 【84】	1-1-2-3-4	仏起讚歎	
	1-1-2-3-4-1	昇座讚歎	
	1-1-2-3-4-1-1	希有	
	1-1-2-3-4-1-2	根利	
	1-1-2-3-4-1-3	智明	
	1-1-2-3-4-1-4	近聖	
	1-1-2-3-4-1-5	脩行	
	1-1-2-3-4-1-6	受持仏智	
	1-1-2-3-4-1-7	開示衆生	
797a24: 【85】	1-1-2-3-4-2	勸人親信	
	1-1-2-3-4-2-1	標勸親近	
	1-1-2-3-4-2-2	釈令信受	
797a26: 【86】	1-1-2-3-5	所化常益	
	1-1-2-3-5-1	常說法華	
	1-1-2-3-5-2	所化常益	
	1-1-2-3-5-2-1	与菩薩俱	
	1-1-2-3-5-2-2	聞法信解	
797a30: 【87】	1-1-2-3-5-3	釈成常義	
797b4: 【88】	1-1-2-4	会成今仏	
	1-1-2-4-1	標成仏現利群生	
797b7: 【89】	1-1-2-4-2	顯異名成仏処所	
	1-1-2-4-2-1	阿闍	
	1-1-2-4-2-2	須弥頂	
	1-1-2-4-2-3	師子音	
	1-1-2-4-2-4	師子相	
797b13: 【90】	1-1-2-4-2-5	虚空住	
	1-1-2-4-2-6	常滅	
	1-1-2-4-2-7	帝相	
	1-1-2-4-2-8	梵相	
797b16: 【91】	1-1-2-4-2-9	阿弥陀	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

	1-1-2-4-2-10	度世苦惱	
	1-1-2-4-2-11	多摩羅跋耨檀香	
	1-1-2-4-2-12	須弥相	
797b20: 【92】	1-1-2-4-2-13	雲自在	
	1-1-2-4-2-14	雲自在王	
	1-1-2-4-2-15	懷怖畏	
	1-1-2-4-2-16	釈迦牟尼	
797b27: 【93】	1-2	明過去結縁会弟子事	
	1-2-1	正会弟子事	
	1-2-1-1	明昔化	
	1-2-1-1-1	明昔化	『般若等經*』
797c5: 【94】	1-2-1-1-2	明住小所以	
797c9: 【95】	1-2-1-2	正結会之	
797c10: 【96】	1-2-2	釈疑難	「有難言*」
	1-2-2-1	牒所疑之人	
797c19: 【97】	1-2-2-2	釈彼亦作仏	『菩薩処胎經』「如来寿量品*」
798a5: 【98】	1-2-2-3	解所由	『涅槃經』「古人解云（引楞伽）」 「信解品」『大乘莊嚴經論』 『大乘莊嚴經論*』『勝鬘經*』 『成唯識論』『涅槃經』（2） 「古師解云（引菩提留支解）」 『涅槃經*』（4）『瑜伽等*』
798c15: 【99】	2	顯今果令知捨權以取実	『法華論*』『般若經*』
	2-1	法	
	2-1-1	明今実	
	2-1-1-1	知機熟	
	2-1-1-1-1	涅槃時到	
	2-1-1-1-2	衆又清浄	
	2-1-1-1-3	信解堅固	
	2-1-1-1-4	了達空法	
	2-1-1-1-4-1	生空	
	2-1-1-1-4-2	法空	
	2-1-1-1-5	深入禪定	
798c30: 【100】	2-1-1-2	説一乘	『解深密經』「菓草喩品*」『勝鬘經』（2）『解深密經』『涅槃經*』
799a19: 【101】	2-1-2	釈先權所由	
799a25: 【102】	2-2	喩[説]	
	2-2-1	喩昔權	「信解品*」
	2-2-1-1	初將離險喩	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

	2-2-1-1-1	欲過惡處	
	2-2-1-1-2	將往寶方	『正法華*』（2）
799b19: 【103】	2-2-1-1-3	商主諳途	
	2-2-1-1-4	方行引導	
	2-2-1-1-A	導師謂仏此具五徳	
	2-2-1-1-A-1	聡	
	2-2-1-1-A-2	慧	
	2-2-1-1-A-3	明	
	2-2-1-1-A-4	達	
	2-2-1-1-A-5	善知險道通塞之相	
799b26: 【104】	2-2-1-2	中途方退喩	
799c4: 【105】	2-2-1-3	為設化城[喩]	
	2-2-1-3-1	仮思念	
	2-2-1-3-2	設化城	『撰大乘論』『法華論』
799c27: 【106】	2-2-1-3-3	勸住勿怖	
	2-2-1-3-4	説入城益	
800a2: 【107】	2-2-1-4	衆倦皆息喩	
	2-2-1-4-1	在有学…規免險道	
	2-2-1-4-2	成無学…得有余滅	『勝鬘經*』『譬喩品*』
800a19: 【108】	2-2-2	喩今実	
	2-2-2-1	標滅化	
	2-2-2-2	正告真	
800a27: 【109】	2-3	合説	
	2-3-1	合昔權	
	2-3-1-1	合初將離險	
800b4: 【110】	2-3-1-2	合中途方退	
800b8: 【111】	2-3-1-3	合為説化城	
	2-3-2	方合今実	
800b14: 【112】	2-3-2-1	法説滅化告真	
	2-3-2-1-1	説彼非真	
	2-3-2-1-2	説二乘意	『勝鬘經』
800b28: 【113】	2-3-2-2	合説滅化告真	
800b30: 【114】	A	偈頌（49.5）	
	A-1	頌前初説宿因…如來事（30.5）	
	A-1-1	頌昔因縁（28.5）	
	A-1-1-1	頌會自身事（27.5）	
	A-1-1-1-A	説仏滅久近	
	A-1-1-1-B	正明彼事	
	A-1-1-1-B-1	明仏壽成道（4）	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

	A-1-1-1-B-1-1	法不現前 (3)	
	A-1-1-1-B-1-1-1	法不現前 (1)	
	A-1-1-1-B-1-1-2	華樂供養 (2)	
800c15: 【115】	A-1-1-1-B-1-2	明仏成道 (1)	
800c17: 【116】	A-1-1-1-B-2	転正法輪 (13)	
	A-1-1-1-B-2-1	請 (8)	
	A-1-1-1-B-2-1-1	十六子請 (3)	
800c21: 【117】	A-1-1-1-B-2-1-2	諸梵王請 (5)	
	A-1-1-1-B-2-1-2-1	東方 (3)	
800c24: 【118】	A-1-1-1-B-2-1-2-2	余方 (2)	
800c26: 【119】	A-1-1-1-B-2-2	正転 (5)	
	A-1-1-1-B-2-2-1	許可正説 (2)	
801a8: 【120】	A-1-1-1-B-2-2-2	衆生獲益 (3)	
	A-1-1-1-B-2-2-2-1	第一会 (1)	
	A-1-1-1-B-2-2-2-2	第二会 (1)	
	A-1-1-1-B-2-2-2-3	第三第四会 (1)	
801a14: 【121】	A-1-1-1-B-3	子繼伝燈 (9.5)	
	A-1-1-1-B-3-1	出家啓請 (2)	
801a19: 【122】	A-1-1-1-B-3-2	仏許正説 (2.5)	
801a21: 【123】	A-1-1-1-B-3-3	諸子伝燈 (4)	
	A-1-1-1-B-3-3-1	仏入寂定 (1)	
	A-1-1-1-B-3-3-2	諸子伝燈 (2)	
	A-1-1-1-B-3-3-3	所度多少 (1)	
801a24: 【124】	A-1-1-1-B-3-4	所化常益 (1)	
801a26: 【125】	A-1-1-1-B-4	会成今仏 (1)	
801a29: 【126】	A-1-1-2	頌会弟子事 (1)	
801b3: 【127】	A-1-2	頌結[成今説]誠勿[驚]怖 (2)	
801b6: 【128】	A-2	頌顕今果…化城喩事 (19)	
	A-2-1	頌喩説 (11.5)	
	A-2-1-1	頌昔説権喩 (9)	
	A-2-1-1-1	初将離險喩 (3)	
	A-2-1-1-1-1	道険多難 (1)	
	A-2-1-1-1-2	欲過路遥 (1)	
	A-2-1-1-1-3	導師濟難 (1)	
	801b17: 【129】	A-2-1-1-2	中途方退喩 (1)
801b19: 【130】	A-2-1-1-3	為設化城喩 (4)	
	A-2-1-1-3-1	起念 (1)	
801b22: 【131】	A-2-1-1-3-2	化作 (2)	『説無垢称経』 『説無垢称経*』
801c1: 【132】	A-2-1-1-3-3	勸入 (1)	

チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳（望月）

801c3: 【133】	A-2-1-1-4	衆倦皆息喩（1）	
801c5: 【134】	A-2-1-2	頌今説実喩（2.5）	
	A-2-1-2-1	標減化（1）	
	A-2-1-2-2	正告真（1.5）	
801c8: 【135】	A-2-2	頌合説（7.5）	
	A-2-2-1	頌合昔権（2.5）	
	A-2-2-1-1	初將離險（0.5）	
	A-2-2-1-2	中途方退（1）	
	A-2-2-1-3	為設化城（1）	
801c13: 【136】	A-2-2-2	頌合今説実（5）	
	A-2-2-2-1	標今説実（1）	
801c16: 【137】	A-2-2-2-2	勸捨権就実（3）	
	A-2-2-2-2-1	勸捨権（1.5）	
	A-2-2-2-2-2	勸取実（1.5）	
801c19: 【138】	A-2-2-2-3	結之（1）	

〈キーワード〉

『妙法蓮華経玄賛』、『法華経』、「化城喩品」、基、慈恩大師